世界・物体
怪盗・蔓延り、愛を
探偵・掘り当て、さき開く恋。
1
novel あーかんそー州
illustration あーかんそー州
All Made by A-kansouyu
合衆国書房

前書き

このファイルは「世界：物体蔓延り、怪盗：愛を掘り当て、探偵：さき開く恋。1」
の横読み体験版です。

本編は次のページから。同時収録の「物体がセカイを掻き乱す　エピソード 1」は 40 ページからです。
以下本文。

――どうして僕は、こんなことになっているんだ?
「イけっ!❤!イけぇっ!❤❤イってぇ愛くん!❤❤❤」
「ああぁぁっ!❤❤やだ❤❤いやだっ!❤❤それやめへぇ❤❤❤」
脳へと直接下される命令に、僕は忠実に従う。
一ピストンごとに、感度を無理矢理引き上げられる。
最初は痛かったのが、何も感じないようになり、快感を感じ始め、前立腺が泣き叫び始め、多幸感が増えていき、頭がそれだけになって、それでもまだ気持ちよくなる。
「壊れりゅ❤❤❤壊れりゅからぁ!❤❤❤」
「壊れちゃえっ❤❤❤壊れろっ❤❤❤私の奴隷になれっ❤❤❤」
こんなのは完璧にレイプのはずなのに、悦びがあることを強制させられている。
サキュバスという奴は、女性の体を持っていたはずなんだ。
ならなんで僕が挿入されて、僕が性感に翻弄されているんだ?
「う、ううぅぅぅっ❤❤❤❤」
「あぁっ❤❤❤イってるんだねっ❤❤❤嬉しいよっ❤❤もっとイかせて、もっと愛くんを支配してあげるっ❤❤❤」
オーガズムなんて、射精しか知らなかったし、それだって知識としてあるだけで経験なんてほとんどない。
それが、こんな、下半身が溶けるような快楽を伴うのなんて、全然知らない。
知らなかったのに、もう何度か味あわされている。
お尻にペニスを撃ち込まれるなんて、想像の範囲外だし、それにこんなにも破滅的な気持ちよさがあるなんて……。
「精液あげるねっ❤❤全部飲んでっ!❤❤❤もっとえっちになってぇっ!❤❤❤」
一番奥まで突きこまれ、震えを感じる。
ぶびゅっ!　ぶびゅぶびゅぶびゅぅっ!
「ほ、ほあぁ❤❤❤あちゅい❤❤❤あちゅいよおぉっ!❤❤❤」
直腸内で爆発したそれは、温度によって火傷させるような酸によって熔かされるような。はたまたその両方か。その液体が良くない、とても良くない効果を持っていることは明らかだった。
「くうぅっ❤❤❤はひ❤❤はひぃ……!❤❤かゆい❤❤おしり、かゆいっ❤❤❤」
どろぉ……っと腸壁が粘液になったイメージが湧いて、それが何かを期待している。何か棒状のもので擦られ、引っ掻きまわされることを望み始めてしまっている。
それが形になって、現れている。
意思を持つ獣がお尻の中に生まれてしまった。入っている棒に肉が絡み付いて、次の動きをきちんと感じられるようになろうとする。
締め付けるのとは違う、独り善がりな運動だった。
すっかりと慣らされた反応だった。気持ちいいのを欲しいと思うだけの行動でしかなか

った。
「わかるんだぁ愛くぅん❤❤今の愛くんのナカ、とっても気持ちいいものになってるってぇ❤❤❤私を、すっごく満足させてくれる穴になってるんだってぇ❤❤❤」
「ふぁ……❤❤❤ゃだ……❤❤❤さきさ、とめて……❤❤❤」
　まだ、溺れることができるのか。まだ快感物質を止めず行ってしまうのか。
「やめなぁい❤❤❤愛くんだって今やめたら欲求不満になるのわかってるくせにぃ❤❤❤」
　この快楽の坩堝から、どう抜け出せばいいんだろうか。
　もはや是非もなく、助けも来ず、望みが何もなくただ奔流に棹されるのみなのかと思うことしかできなかった。

　イントロダクション〜探偵のお仕事〜

「待て！　……奴は南口へ向かって逃げています！」
　探偵なんてやっていると、色々な悪人と出会って捕まえたり逃げられたりする。
「もう少し体が大きければ！」
　例えば今みたいに有名なアンティークの強盗犯を必死に追いかけることもある。
　けれど身辺調査とか人探しとかそういうのをしたことが一切ないのは、ある意味探偵らしくある意味探偵らしくない。そんなことをやる探偵ってのには、面白味がないだろう？……なんてね。
「まだ建物の中にいるはず……！　なんとしても捕まえる！」
　んまあ、結局僕も世に蔓延る〝物体〟の一つだったというだけなんだけど。
　多少は普通の人間だったらなと思う。だってそうすれば、もっとまともな生活ができるし、人の死体なんて見なくてもよくなる。
　あと……、もっとまともに友人付き合いができる。
　仲良くなりたいのに、仲良くなれないっていうのはもどかしいものだ。
「……トイレ。怪しいな」
　いつどこで何に巻き込むかもわからない。僕は、巻き込む側なんだ。

　　イントロダクション〜怪盗の憂さ晴らし〜

怪盗なんて、楽しい仕事じゃない。
「んー❤愛くんのショタチン最高ー❤」
所詮は裏家業。盗むこと以上にクライアントとの関係維持が難しい。
私は女で男好きをする容姿を持っているとはいえ、体は売らない。仕事の遂行以上に、フェアな関係を保つ必要があるってこと。
「ふぇ……?　ぁ……。　咲希、さ……?」
だから、好みの男の子を仕事のついでに食べるくらいのことは役得として必要なことなわけ。
ターゲットが先方の目標じゃなかったから、トイレに連れ込んで他の追っ手に見つかるかもしれないという焦燥的な背徳感を餌に個室ックスを敢行することが、今回の報酬が半分も出ない私には必要なの。
「んふふー❤咲希ですよー❤愛くん、私のこと好き?❤」
手元の商売道具を弄る。
キィ……ン……、と聞いていると頭を遠くする音が鳴る。
勃起はしつつも半分眠るようだった愛くん。夢作　愛之（ゆめさく　あいの）くんの瞳がピンクに染まり、顔がほどける。
「あぅ!❤❤す、すきっ❤❤さきさんすきっ❤❤❤」
「んん❤❤うへ、愛くんかわ❤かわいい……❤❤❤」
見た目バッチリ。高校生なのに小学生みたいな顔立ち。しかも超可愛い系。大体女の子だよこれ。でもチンチンついてんですけどね。ミニマムサイズなのもまたかわえ……❤
こうして好き好き言われながら抱き付かれるだけで心が洗われていくよう……。
入り口を引っかけるくらいしかできないけどそんなもんは関係ない。
「いやーん❤❤愛くんほんとに可愛い❤❤やばいなー❤❤素面（いつも）の時に誤魔化せるか自信ないわー❤❤」
そりゃあね。愛くん自身が女殺しだったらそれはそれで最高だろうしセックスをセックスとして楽しめるんだろう。
けれどそれは二律背反。可愛い男の子が小さいおちんちんを持っていることは当然のこと。
「あぅー❤❤さきおねぇちゃん❤❤❤さきおねぇちゃぁ……❤❤❤」
それに容姿もさることながら愛くんは性格も可愛い。大人っぽいのに照れ屋さんで私なんかに恋しちゃってる。いじらしくてもう……。こうして心の扉を無くすとひたすらに好意をぶつけてくるんだから、私としてはたまらない。
けどこればかりは、恋愛感情ばかりはコントロールしていない。
男の子の純情を弄ぶ趣味はないし、まともな恋愛ができないのは百も承知。ゆえに、彼氏なんて遠ざけるべき存在。

「うふ❤ぎゅー❤❤あいくぅん❤❤」
「ほにゃぁ……!❤❤ぎゅってするにょしゅごいぃ❤❤❤」
　愛くんとは彼氏彼女なんかじゃない。むしろ、ある時には私たちは敵対していると言っていい。何せ彼は、〝探偵〟だ。
　怪盗と探偵なんて、ベターすぎる巡り合わせだけれど。しかし私は紛れもない怪盗なのであって、彼もそう。
　だから、彼氏彼女なんかじゃない。
「愛くんの体はあったかいなぁ……❤❤抱き枕にしてえ……」
　筋肉質なんかじゃ全然ない、けれど脂肪もあんまりない、まさに子供体型。舐め回したい。華奢な腰に一生抱き付いていたい。
「今度お家に連れ込んで……。それで一緒に寝ようね一愛くん❤❤」
「はひ❤❤いきますっ❤❤さきおねえちゃんのおへやいくぅ……❤❤❤」
「んっ❤もうお漏らししちゃってぇ❤んー?　……あー、前にイクって言ったら射精する暗示かけたのがここで出たのかなぁ」
　射精することは全く問題ないけれど、あまりにも唐突だったから原因を考える。
　その暗示、私は解かなかったけど組織が解いたはずである。解いてなかったらそれを言うたびにアヘ顔晒すことになるから。
　まあ深層心理ってのは複雑でデリケートらしいから仕方がないかもしれない。
「んー、まだシたいから頑張ってね❤」
　時間はまだまだある。
　精力剤媚剤も使わないこともないから常備している。皮下注射の、すごい効く奴をプレゼント。
　夜はまだまだこれからなんだから。

　――童話・民話の類いは、二種類に区別ができる。

一つは荒唐無稽の作り話。
もう一つは、事実に即して叙事的に作られたかあるいはそれ自身。
その二つの見極めとはどのようにすればよいのだろうか。あまりにも現実的ではなければ、創作だろうか。
本当に?　貴方が見ている現実に綻びがないと言い切ることは、できないかもしれない。
この世界では当たり前のように現実を■■した存在が蔓延っている。彼らと貴方がたの絶対的な違いなんて、有りはしないんだから。
……さて、やはり民話などにより語り継がれている存在に、サキュバスというものがある。
女形の悪魔で男の精気を盗む、とは皆まで説明する必要もないはずだ。
彼女らは例えば死期における凍気が元になっただとか、云われる。あるいは不義の言い訳に使われた結果、なのかもしれない。
けれども……、この世界では確かにそれは存在する。
決して比喩でも当て嵌めでもない。色情に狂い狂わせる魔物そのもの。
夢が、あるだろうか。そうかもしれない。彼女らは例外なくグラマラスで美形で、優秀なフェロモンを持っている。
だが、彼女らの生態は複雑怪奇だと言える。
■■■を持った生物。世界の調和をかき乱すものなのだから、当たり前ではある。中でも繁殖方法がかなり特殊なもの。
彼女らは、″呪う″のだ。
例えば、宝石に呪いを込める。呪いを受けたものはどうなるか?
即ち、サキュバスになる。
彼女らの仲間になってしまうのだ。器が変質してしまえば有り様が代わり、存在も変わる。
この出来事の主役は、この『サキュバスの呪い』についてだ。
期待してくれたまえ諸君。存在の変化とは感情の変化を意味する。そこに面白味が生まれるのは当然だろう?

エピソード１　『サキュバスの呪い/???』

このハテナは世界自身が単純であることを望まない、いわば世界の意志と表せよう。
世の中うまくはできていない、ということだな。

「あっ、愛くんだ。久しぶりぃ。学校終わったの?」

　まさに今、僕は帰ろうとしていた。
　通う高校が大学付属で、家の位置からしてその大学の敷地を通り抜ける。僕以外にもそういう生徒はたくさんいる。
「咲希、さん。こんにちは。高校はもう放課ですよ」
「いいなぁー、私まだ講義入ってるんだよねぇ。っていうか今も講義中なんだけどさ。抜け出してきちゃった」
　講義棟の前に整備された歩道。石畳なんかが敷いてあって、木とか芝生とかも植えられている。
「抜け出し……、またそんなことして。講師の方に怒られません?」
「十分くらいで戻ればへーきへーき。あんな退屈なの聞いてるより愛くんとお話できたんだから抜けだした方がよっぽどよかったよぉ」
　僕は背が低い。咲希さんは大人の身長にいつもヒールを履いているから、こうして髪をかき混ぜられるのに丁度いい差がある。……前は多少抵抗したけれど、今は受け入れてしまっている。さらさらで白い手指に弄ばれることに、悪い気が起こらない。
　石川　咲希（さき）さん。僕が高校に入ってから知り合った、大学生の女の人。
　知り合ったのはたしか▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒▒

　――思考誘導。

　この半年くらいでよくお話をするようになって、仲良くなれた。
　ふわふわの緩いパーマがかかった黒いロングヘアーに体のラインをあまり見せないスカートやコート。僕はファッションなんて分からないけれど、いつも可愛い服を着てるなって思う。
　仕事仲間いわく美人は何着ても美人とのことだけど。まあ、咲希さんが美人なのは事実だからそうなのかもしれない。
「んぇ……?　あぁ……。うっ。は、はい。僕も咲希さんと話せて嬉しい、です……?」
「ふふ……。愛くんは真面目だねぇ……」
　僕は最近……、変な気分になることがある。
　僕はここにいるのに、僕の意思が僕のものじゃないような――

『違和感なんて無い』

　――思考が飛んでいた。最近寝不足だったかな……?
「――咲希さん。時間大丈夫ですか?　そろそろ戻った方が……」
「んー。そうかも。いやぁん、もっと愛くんと話してたいんだけどなー!」
　人目も憚らず咲希さんは僕に抱きついてくる。

……赤面してしまうのは、恥ずかしさもあるけどちょっとしたそういう、興奮みたいなものも混じっているわけで。
　僕は、咲希さんのことが好き、なんだろうか。
「誤解されますよ」
「姉弟にしか見えないってぇ。あー！　愛くんかわいいっ！」
　姉弟でも駄目な気はするけど、拒んではいけない気がするから、好きにさせているのが常だ。
　……もし、咲希さんのことが好きでも。咲希さんが、僕のことを好きでも。恋人になれることはないんだろうなと思う。
　だって僕は……。
「ん！　愛くん成分補給完了！　じゃあね！　今度どっか遊びにでも行こう！」
「そうですね。行きましょう」
　まともな恋愛なんて、してはいけないんだから。

　この世界には、色々な『物体』が存在している。
　本当に色々だ。どんな鍵穴にも合う鍵とか、読むとゾンビになる本とか。
　それで街ひとつがゾンビのものになった事件を解決したのは、死に戻りの能力を持った『人の物体』だ。
「夢作くん。君に依頼が来ているな」
　そして物体を集め物体を扱う。という『組織』も、存在している。
　秩序立って物体が起こす事件を解決するには秩序立った、超法規的な集団が必要。詳しいことは知らないけど、世界の半分を握る大財閥が資金を提供しているとか、なんとか。
　それに僕は所属している。
「……『刹那の怪盗』。最近多いな」
「一ヶ月前以来だねぇ。その時はお手柄だったけど」
　……僕は、刑事事件に遭いやすい。『探偵体質』だ。
　探偵ものだと、ありがちだろう？　あの人たちみたいに、僕の行く先行く先で殺人窃盗誘拐……。僕の周りで不幸が巻き起こる。
「そうだね……。『サキュバスの呪い』……？　サキュバス、って何？」
　しかも、僕がその起こった事件を調査すると、大体解決できる。それも平和的、非刃傷的に、だ。
「おや。サキュバスを知らないかい？　まあなんというかだね……」

組織は、物体のことはもれなく確保したがる。しかし確保したならば、有益でない又は人型でない限り廃棄処分。有益な道具になる物体は僕みたいな末端に卸されることもある。
僕もその例には漏れず確保された。昔に……、いや。
まあともかく。それでその能力は、組織にとって有益だったんだ。
だから、僕は組織のエージェント。物体を回収する任務を請け負う、何て仕事をやっている。事件が物体絡みなら僕が担当すれば、安心安全に任務完了だ。
「男の精を……?　そんな生物が、本当に?」
「物体だよ。サキュバス自身もね。サキュバスが先かサキュバスの呪いが先かは、わかっていないけど」
今回の依頼、仕事は『サキュバスの呪い』という宝石の窃盗予告があったためそれの警護。それと犯罪予告の犯人の確保。依頼人はそれが展示してある博物館。犯人の目星、というか心当たりは、以前から同じ手口で犯行を行っている正体不明の『怪盗』。
僕も何度か相対したことがある。窃盗を防ぐことには成功したことも失敗したこともあるが、捕まえられてはいない。
「……ん?　サキュバスの呪いも、物体なんでしょう?　なんで組織が管理していないので?」
多数の物体を所持しているか、あるいは怪盗自身が物体である可能性もある。
組織から盗もうとすることもあるが、ほとんどは美術品や宝飾品がターゲット。現金の盗みはやらない。
「サキュバスの呪いは、人を惹き付けて止まない。まるで魅入られるように、人が集まるんだよ。わかるだろう?」
「……資金源?　随分、みみっちい稼ぎ方だね」
サキュバスの呪いは人をサキュバスにしてしまうというというのが主な効果らしい。触ると駄目なんだとか。
「それもあるけど、物体を見つけるための餌になるから。結構、効率がいいんだぜ」
物体は物体に惹かれる。物体同士は集まる。そんな"性質"がある。
組織には物体の性質を研究する部門みたいなものがあって、色んな理論を捏ね回してそれを説明しようとしている。僕にはよくわからない世界だ。
「あー、サキュバスの呪いは男でもサキュバスにするんだけど、男サキュバスは大体精神壊れちゃうから万が一つにも気を付けてね」
「ふーん……。あのコート着ていけば平気かな」
とある場所にある組織の施設で僕の話し相手になっていたのは越才　長姐（えちざいちょうそ）。昔からの僕のバックアップ担当で、組織の研究者。
僕はワンマンで仕事をするけど、それのマネージャーは必要。というのが組織の言。……コロンボのようなものかもしれない。

「サキュバスの呪いですか?　サキュバスではなく?」
　言っておくが、私は盗み以外の犯罪はしないのだ。
　未成年への性的行為の強要?　あれは半分同意だから……。
「いえ、あれは呪いを作る方を手に入れてそれに作らせるのが常套ですから……」
　だから、誘拐なんかは管轄外。お得意さんの紹介で、その人が事情を知らなかったとすればお断りさせてもらう。
　そもそもサキュバスもサキュバスの呪いも商品価値のあるものではないけれど。サキュバスの呪いは綺麗で見た目だけなら宝石だけど、それはチェレンコフ光を有り難がるのと似たようなもので。触るだけでサキュバスになるとか、劇物以外の何物でもない。
「は、左様ですか。その呪いが特別だと……。ならば、お引き受けしましょう」
　依頼主は声を聞く限り若い男のようだけど、一体何が特別なのだろうか。
　まあその辺は聞くこともできなければ聞かない方がいい。私情に首を突っ込むと大概痛い目に遭うのはこちらにとっては常識常識。
　綱渡りを繰り返す業界。踏み出した一歩は死への一歩。
　……時々なんで私はこの仕事をやっているのかって思うことがある。あんまりにも不安定すぎる。主に身辺の安全的な意味で。
　や、一回染めた以上行くとこまで行くことになるってのはわかってるけどさ。もっとまともにお金稼ぎがしたかった、なんてね。
「引き渡しは渡りで。はい。ありがとうございます。それでは」
　私は組織の言う物体なんかじゃあない。色々と有益な道具を持っているから、ある日手に入れたから、それを使ってお小遣いにしようとしただけ。
　……ヤクザな商売はやるもんじゃないね。ほんと。

「これが、サキュバスの呪い」
　これが目玉の展示だと主張する照明と、特殊なアクリル製だという厚い壁のケースの中にその宝石はあった。
　中心ほど色が濃い赤。宝石の外側は透明にも見えるが中を覗けば新鮮な血に匹敵する鮮烈な色。他の宝石で言う原石のような、くもりだとか別の石の混入だとかはない。けれど美しいカットもされていない。いい意味で言えば、素材そのままというか。
「はい。例のエージェント様ですから説明はいらないと思いますが、あまり見つめていると魅入られますので気を付けてください」
　サキュバスの呪いが展示されている、つまり今回の依頼人である博物館の館長だという男の人はサキュバスの呪いを直視せずにそう説明する。
　ここの人たちは組織の身内じゃないのかな。碌に人員も寄越さずこれ管理しろとか言わ

れてるのかな。組織は人的資源が不足気味らしいからなぁ……。
「対策してきているので大丈夫ですよ」
　館長はケースの鍵を開けてくれる。検分と、ついでに小さい発信器を仕込んでおく。物体使用者にそんな手が通じるとは思えないけど、一応。発信器も普通ではないし。
　僕は『コートの中身は』というトレンチコートの形をした物体を羽織っている。
　このコートは、どう頑張っても中身を見ることができない。何かしらの″良くない″ことが起こって見ることが叶わなくなってしまう。風がどれだけ吹いてもめくれ上がらないとか、ボタンが妙に堅くて爪が剥がれるとか。その様は鉄壁、と呼ばれているとかなんとか。
　まあ、一番大事なのは物体でもコートの中を見ることができないってことなんだけど。
　どんな異常性もコートの中身には不可侵。それを着たものを守り抜く。そんな、トレンチコート。
　深いフードを被れば全身が鎧のように……。
「そのコートも、アレですか?」
「そうですね。大体何があっても大丈夫ですよ」
　これは組織が作った量産型の手袋。触って害のあるものから使用者を守る。
　事前に渡された資料通り。触ると赤く光る。全体が鮮血のような色合いになる。この状態は見るだけでもそれなりに危ないそうだから、館長さんも後ろを向いている。
　石の裏側に、発信器を取り付ける。
　これも組織の謹製で、″粉状″の電波送受信機。現在の表向きの科学力では到底敵わないスーパーなナノマシンの集合で、一粒でも作動する。この日から渡された新作みたいだから、効果は恐らくあるだろう。
「終わりました」
　アクリルのケースを被せ鍵をする。物体持ちに常世の技術はまず紙の鎧にもならないが、ないよりましなはずだ。

「相変わらず反則ねぇこれは」
　私の商売道具の中でも必殺で使えば仕事を成功させる、″ぶっぱ″するべき″とっておき″。
　8 秒だけ、自分以外の時間を止める、ストップウォッチ。8 から 1 の数字が書かれている針が乗った円盤。8 秒を使うと針がもとに戻るのに 8 分かかる。
「ごめんね愛くん。今日は貴方の相手をしている暇はないからねぇ」
　8 秒は短いようで長い。
　周りへ自分の存在を違和感を抱かせなくする、仮面舞踏会で被るような仮面で警備の近くからストップウォッチを発動する。次に壁であればなんでもすり抜けることができる手袋でケースの壁をすり抜け、組織の連中から頂戴した危ないものを触っても平気になる布

でサキュバスの呪いを包んで持ち去るくらいのことは、8秒でできる。
「そして時は動き出す。ってね」
　警備を二度潜り抜け、目標のぶつも手中に納めたところで世界は再開する。
　愛くんも警備員も呪いを背に立っていたから気付かれるまで少し時間があるだろう。
「――奪われてるぞ!」
　ほらね。そして私はもう廊下に出た。愛くんなら色々駆使して私を見つけるくらいできたかもしれないが、もうそれも無理だろう――
「止まれ!　お前が『刹那の怪盗』だな!」
　その可愛くて凛々しい、聞いてるだけで脳細胞が再生しそうなボイス。
「……よく、わかったな」
「種は明かさないぞ……!　大人しく両手を上げて投降するんだ!」
　拳銃を構えている愛くん。ちっこいのに頑張るなぁ。
　撃っても肩大丈夫なのかしらん。
「あぁわかった。《大人しくしていようか》」
　でも、残念。愛くんじゃあ私を捕まえることはできない。
　何やら大仰なコートなんて着ているけど、肝心の中身が堕ちていては、意味をなさない。
「あぇ……?　うぅ……?」
　んー❤目がピンクになってへたりこむ姿❤
「愛くん❤《どうして私のことがわかったのかな》❤」
「うぅ……!?　あっ……❤さきおねぇちゃん……❤え、えと、サキュバスの呪いに発信器がついてて❤それを辿って……❤」
　発信器?　そんなのどこにも……?
　《征服の魔眼》は、相手の目を五秒見つめることができれば、相手を征服できるという″魔眼″。愛くんは私に逆らえないし私が魔眼を使って言ったことなら何でも聞く。
　言うことを聞くだけでそれは嫌々かもしれないのがこの魔眼で、トロンとした顔でなんの抵抗もないのは愛くんが私のことを好きだから。かわいいね。
「《どこについてるの?》」
「こ、粉が❤ナノマシンの粉が付いてるのっ❤」
　ナノマシン。そりゃあ見当たらないはずだ。
「洗えば取れるのかな。……まあいいや。それよりも、愛くんありがとね❤ご褒美あげる❤」
　んちゅ。ちゅぶっ。れろれるん!　ちゅぷぅ……。
「んん!❤んっ!❤んむぁっ……❤❤」
　愛くんにキスして舌を絡ませると、必死に応えてくれるからいいんだよなぁ。
　キスのしがいがあるというか。愛くんの口は全部おいしいけど。
「んちゅ❤……今度もっとゆっくりキスしよっか❤今日はもうリミットがあるから❤」
　私たちがこうして少し奥まったところでいちゃいちゃしてても誰も気づかないのは付け

てる仮面のお陰だけど、これはあまりにも違和感を感じさせすぎると効果が解けてしまうから、ほどほどにしなければ。
「うゅ❤❤❤きすしゅきぃ❤❤❤さきおねえちゃ、しゅきぃ……❤❤❤」
　ひしっ……と抱き付かれちゃう。
「やーん❤❤❤もうこれ結婚❤❤結婚だよぉ❤❤❤愛くんと結婚しちゃったぁ……❤❤❤」
　愛くんのハグはトリップしちゃうから危ない。
　たぶんこれこそが愛くんの能力なんじゃない？　私はそう思うね。

『サキュバスの呪い』

　『サキュバス』が作り出す宝石様（よう）の非生物型物体。【データ検閲】と同等程度のモース硬度を示し、ダイヤモンドや水圧での切断が可能であるが、【データ検閲】以下にはサキュバスの呪いを観察することが不可能であるから組成構造は不明である。
（中略）
　内部には推定；未知のエネルギー源が存在しており、接触するとエネルギーが励起することにより色が変化する。同時にサキュバスの呪いに触れていたおよび見ていた人間をサキュバスへ変質させようとする。これは単純物性現実変容反応であり、変容強度は【データ検閲】である。サキュバスの詳細は　ページ：サキュバス/インキュバス　（クリアランスオブセイバー２以上閲覧可能）を参照されたし。

補遺：未確認であるが、《インキュバスの呪い》の存在が推定されている。サキュバスの呪いはサキュバスの雄にあたるインキュバスへ変容させることはないが、インキュバスとサキュバスを生物種とするならば両者は同種であり、インキュバスも呪いを使用した繁殖方法を取っていると考えられるためである。これを発見したものは担当職員へ連絡すること。

　ページ:サキュバス/インキュバス　へのアクセスを確認.
職員 ID:
▩▩▩――

不明なアクセスを確認......

アクセス要件:B-unknown.

特例:B 発令によりアクセスを.......

管理者権限発令.

アクセス権限ありません.

アクセスには「世界：物体蔓延り、怪盗：愛を掘り当て、怪盗：さき開く恋　1」の製品版をご購入願います.

「……私の本意ではないことに留意してもらいたい」

まずい、と思った。
ブツの回収が完了し拠点へ戻っている最中に気が付いた。
（く……ぅっ。体が熱い……、燃えちゃう……）
この感覚。体を異次元からいじくりまわされ、操作される感じ。
まぎれもなく、″蝕まれている″。
原因は考えるまでもなく、あの宝石。布に包んで懐に忍ばせたはずのあれのせいだ。
（サキュバスは、なるもんじゃないでしょうに……）
あれになっては、人として終わりだ。
人をたぶらかす幽鬼。あれらはただただ人を堕落させるためだけに行動するのだ。聞いた話によれば、伝承やその他創作上において描かれたそれの性質を、そのまま映すらしい。
生物として根本原理がねじれてしまっている。生物の要求はひとえに快楽を追求すること。その延長線上に生存であり繁殖であり、があると思っている。けれどああいった″作られた″奴等はそうじゃない。
繁殖するべきであるから繁殖する。精を絞らなければならないからそうする。そういった、″設定された″行動しか取れない。
私は、私であり続けたい。サキュバスになんて、なってたまるもんか。
「くぅ……！　う、うごけぇ……！」
少なからずこういうときには克己心が大事だ。自己を改竄してくる外因を必死こいて跳ね返すよう努力する。それだけで、ある程度進行が止まってくれる。
「こ、こんなものぉ……！」
震え動かない腕を、全身を包み込む怠さ重さを、振り切って、服に手を入れ、それを掴み……。
「聞いていたより、随分芯があるじゃあないか」
投げようとしたところで、手首が止まる。手のひらを開けないように、掴まれる。
予想外。一瞬思考が止まる。
そら。一つでも気を許したら一気に進んじゃうじゃない。
「あ、なたっ、誰よっ……！　離しなさい……！」
テコでも動かなさそうに感じるのは体が蝕まれているからだろう。抜けるように抜こうとしてるし私は並みの男より力はある。
「いやはや。こそこそ逃げ回る怪盗なんぞいうのは、腑抜けかと思っていたけれど。しかしそれでも、予定は変わらないな」
「ふ、ふざけないで！　貴方、組織のエージェントでしょう!?　助けなさいよ！」
極限状態の中で必死に抵抗する。それは男の腕にであって内臓以外もう変化してしまったような気もするサキュバスの呪いにであって。
こんな状況で接触してくるのなんてあそこの連中しかないからと、勝手に口が喋っている。

「そうとも言えるしそうとも言えないな、シーフ・フロイライン。けれど私の目的はそれとは真逆ですらあるのだよ」
　男は私の手から熱く胎動すらしているそれを取る。
　隙はないか……？　いや、隙だらけ……！
「《興奮剤》！」
　頭の中が、カッと熱くなる。
　流れ出る神経物質。引き伸ばされる時間。一気に覚醒し加速する思考回路。
　男の手はかなり緩んでいる。というよりこれは素人の手つきだ。よほど体重の差がない限り行ける。
　逃走経路は林の中がいい。
「む？　なぜ抜かれた……？」
　手足に感覚が戻ってくる。人間としての感覚。化け物（サキュバス）なんかのものじゃあない、慣れ親しんだ理性的な存在が実感できる。
「《過信号》！」
　脳に埋め込んである、緊急用の覚醒装置。
　音声入力で色々無理ができる。生理ホルモンを分泌させたり、神経信号のバイパスを太くして筋肉の稼働量を増やしたり。
「相変わらず寿命縮むわこれ……」
　代償として体はボロボロになるけど、緊急用だから仕方ない。
　捕まるわけにはいかない。私は生存欲のみで稼業を続けているもの。
　生存欲は快楽の渇望から来ている、とは把握しているけど私のそれは明らかに愛くんなのであって。
　愛くんと遊んでたら気持ちいいから私はまだ生きていたい。愛くんと出会ってやっと生きる意味ができた。ご飯を食べる以外の必要性が生まれた。
　しかし……。
「君も結構育っているね。ならば多少は、融通してあげよう」
「ぐぅっ!?　く、くそ……！　組織の犬が……！」
「これ以上は面倒くさいから終わり。規定に戻すよ」
　この世界は、そう。理不尽なのである。
　持っているアイテムの、出力で勝負は決まる。此方か彼方かが決まってしまう。
　私が愛くんを出し抜いたことと同じように私だって出し抜かれる。
　ここで気を失った後、目を覚ませはするだろうが無事安息はあまり望めない。組織に尋問されて物体吐き出して処分されるか記憶消されて一般人になるか。一般人になれればまだ救いはあるけどその保証はない。奴らは変に気紛れだ。
　死が決まってない以上、身の振り方を考えることに専念していたけどそれもやがて、途切れた。

確かに僕は、奴を追い詰めたはずだった。
いや追い詰めてはいなかったけれど、対峙してこれからどうお縄にするか。向こうの物体とこちらの物体、どちらが相手を出し抜くかの勝負が始まるはずだったのに、気が付いた時には博物館の隅で倒れてしまっていた。
″刹那″に拳銃を構えて啖呵を切ったところから記憶がない。
「エージェント様。警備に指示を頂ければと……」
呪いを奪われてしまい少しの間僕が消えていたことから博物館はかなりの混乱に陥ってしまっている。とは言ってもいるのは皆ここの警備員だけど。
失敗してしまったように感じるけれどまだ逃げられた訳じゃない。発信器がまだ反応を示している。なぜか逃げずに、近くの森の中にとどまっているようだ。
「ホシはまだ逃げ切っていません。奴は……、もはや僕一人では手に余るほど力を持っているのかもしれません。けれどこの時を無駄にするわけにもいかない」
次から担当から降ろしてもらおう。たぶん組織が思ってるより刹那は強大になってしまっている。物体を扱っていると堅気では信じられないほどに物体と接することが増える。それが組織に管理されていないフリーの活動であれば、手に持つ力に直結する。
もっとも、それは組織に本格的にマークされることにも繋がるわけで。
僕なんか弱小も弱小。使えば確実に遂行できる特別な能力じゃないし、むしろ一人を余儀なくされるだけ扱いづらいはずだ。それでも僕がやれているのは、安全性だけどそれは今はいい。
「応援を呼んであります。僕は、大丈夫なので一人で行きますが僕だけでいいです。組織から人が来たらそっちの指示を仰いでください」
――
拳銃、『量産型魔弾の射手改』を構えながら発信器が指す位置まで走る。森の中だからむしろ転んで怪我をしないことに気を付けた方がいい。そんなことでヘルプを呼んでいてはエージェント失格だ。
ちなみにこの拳銃は『魔弾の射手』で使われる銃そのもののレプリカで、けれど効果はきちんと発揮される。六発までは必中で七発目はこれに紐付いた悪魔が望んだ所に当たる。
まあ、レボルバー式で装弾数″六発″しかないんだけど。″改良″されてあるから。欠陥は無くすべきという組織の開発部門の理念には頭が下がるね。
前は七発あったけど量産型だから七発目を撃たずに持ち替えればいい、っていう銃だった。廃棄に一発だけ弾が残ってる銃がいっぱい廃棄されるのは哀愁がある。さすがに悪魔もかわいそう。
「この辺のはず……」

五分は走っていない。位置もほとんど変わらずだ。
その場をうろつくように少しだけ動いているから気絶しているとかそういうことではないはずである。
音が聞こえる。地面の草葉を踏む僕以外のものと……。

それは、頭の中で延々と繰り返されるビジョンだった。
いわばただの妄想だった。けれど今の私にはその欲望があまりに強すぎて、幻覚として現れていた。
虚しい、在るようだと頭が勝手に思い込んでいた。それほどまでに情動は大きく、他にできることなんてなかった。
私は幻覚の中で愛くんのことを、犯していた。
『やめて咲希さんっ！　正気に戻ってぇっ！　くそ、反物体が効かないってどういうこと……！』
『咲希おねえちゃん❤気持ちいいっ❤咲希おねえちゃんすきぃっ❤』
わからない。脳に伝わってくる感覚が本物なのか否かすら。
愛くんは抵抗していた。愛くんは悦んでいた。どっちが、本物？　それともどっちも本物じゃあない？
『愛くん愛くん愛くん可愛い可愛い可愛い孕んで孕んで孕んで』
下半身に支配されるだとか、そういう言い回しがあるけれどこれこそが比喩でもなくその通りなのだと思った。
新しくできていたそのモノはただ主張する。骨格までもが変わったらしい体がただ″勃起″を維持することだけを考えている。精巣が、前立腺が、精嚢が、音でも鳴っているのではないかという勢いで胎動し続けその蠢きのみで私に快感を伝えてくる。
けれどそれは単においてただ、この棒を穴に入れたい。そういう欲望にのみ収束してしまっていた。純然な性欲の、繁殖欲の発露。ただただ棒を穴に挿入れたい。
そうすれば気持ちいいことはわかっていた。初めて剥けた亀頭もその奔流をいまだ味わっていない尿道や射精管も、真新しい神経が伝達してくる性欲の昂りにただ期待をしていた。
『愛くんすき』
あぁけれど。なんだろうこの気持ち。
木っ端な理性が訴えてくる。誰でもいいわけじゃないと。穴だったらいいわけじゃない。ただの穴であれば体は満たせても心を満たせないと性欲の塊に抗っている。
『えぅ!?　やっ、いやぁ……！　もっときちんとした形で言ってほしいですっ！　だから、放してぇ……』

今さら愛くんが嫌悪を向けてくるとは理性も本能も思ってなかった。
だってほら。気持ちからしてそうなるように仕向けてたのは私だし。
だからこそこのあと一切何も躊躇することはないことがわかっていた。愛くん以外に性欲を吐き出すことは憚られても愛くんにだったらそれはもう何度となくやってきたことだし愛くんも悦ぶから損する人がいない。そう心の底から思っていた。
愛くんと公然の肉体関係を結ぶことを良しとしていなかった頃の自分はもうどこにもいなかった。

色々な、驚きがあった。
まず思い浮かんだのはなんで咲希さんがここにいるの、ってことだった。
次には咲希さんが追っている怪盗だったのか。それから咲希さんのあまりに余裕の無さそうな体調の心配と、少し変化した髪色や頭から生えているヤギの角のようなものについてなんかも。
「咲希さん。まず落ち着いてください。ね？　落ち着いて僕の話を聞いて……」
全くテンパっていた。完全な公私混同というか身内贔屓というか、にじりよってくる相手に拳銃の威嚇もせずましてや高圧な態度すら取らないとは慎重の欠片もない。組織のエージェントとしての対応じゃなく、愛作夢之としてでしかなかった。
「愛くぅん……？　そこにいるの？　わぁ。嬉しいなぁ愛くんと一つになれるなんて」
様子は完全におかしい。
考えられるのはサキュバスの呪いにあてられているってことだけど、こんなに正気を失うものとは聞いていない。
「咲希さん！　僕の声が聞こえないの!?　ねぇってば!」
捕まえようとする腕を避ける。サキュバスは遠距離での誘惑方法も持っているけれど今はやってきていないしなにより至近距離でキスでもされようものなら終わってしまう。咲希さんの餌になってしまう。
……それはそれで、咲希さんとならキスしてみたいし何もしがらみが無ければ咲さんの餌にくらいなってもいいとか、思わないでもないけど。これは仕事だし、今咲希さんは苦しんでいるんだ。お世話になっている女の人一人助けられなくてどうするか。
「今、助けますよっ!」
組織から渡された新しい装備というか薬を使う。
『反物体』という、誰ぞ組織に新しく所属した人型物体の血液。注射器に入ったそれは弾丸として飛ばせるようにすらなっていない実験段階出たての代物。
注射されると体内にある物体由来の性質を緩和できる。物体に直接かけても有効だし一時的なターゲットの無効化にこれほど有力なものはない、というのは僕の相方の言ってい

た文句。
　注射器と言っても予防接種とかで使うようなのじゃなくて、持ち手が握れて刺しただけで注入される。
「わーん❤愛くん愛くぅん❤❤自分から来てくれるなんてぇ❤❤」
「さ、咲希さん。もう大丈夫だから……」
　へその上辺りに押し付ける。同時に咲希さんの匂いにふわっと包まれて、体が柔らかいものに包まれる。
　いつもよりも、沈みこむような感じがした。匂いも前よりなんだか我慢できないような、脳の中に染み込んでくるような……。
「愛くんハグ好きだもんねぇ❤❤私も愛くんとハグするの大好きだよぉ❤❤❤」
　お、おかしい。速効で効果が現れるはず……。
　この状況はまずい。何がまずいってサキュバスの体は、予想以上に僕の神経を溶かしてきている。
「うぁ、離して咲希さん……。抜けない……!」
　元々僕がノーパワーなのもあるけど、サキュバスは魔物だから筋力が人の何倍もある。
「はぁー❤❤愛くん❤❤私ね、愛くんの匂い嗅いでるとね❤堪らなくなってきちゃうのぉ❤❤❤」
　咲希さんは、僕を抱き締めたまま僕の股間に手を伸ばしてくる。
「やめて咲希さんっ！　正気に戻ってぇっ！　くそ、反物体が効かないってどういうこと……!」
「んんーっ!❤❤愛くんも期待してるっ❤❤❤愛くんの可愛いおちんちん、可愛がってあげるからねぇっ❤❤❤」
「ひゃっ！　だめ咲希さん！　そんなところ触っちゃぁ……!」
　期待してるだとか、股間は素直だとか、そういう枠を飛び越えたこれはまるで指令のようなもの。サキュバスが私で興奮しろと命じているからそれにただ従うしかないのが、人間の体。
　……撫でられたら気持ちよくなっちゃうのが、悲しい。
　咲希さんとこんな形で関係を結びたくない。そう真摯な気持ちで打開策を探る。
　もう、反物体はこれから効いてこないと思ってなんとかするしかない……。
「《コート脱いでね》❤❤」
　必死にもがいている時に、その言葉。瞬間、僕の頭に靄がかかる。
　思考が減る。手が勝手に動く。抗えない、サキュバスの魔力に。
　いや……、これは違う。サキュバスの能力にこんなものはなかった。
　サキュバスの魅了は、もっと人を性的な興奮状態にさせて抗えないようにするもので、強制力が少ないはず……!
「《其は秩序なる混沌》！　《万事偏らず皆平に》!」

力を持った言葉というものが、ある。
『言霊』とだけ称されるそれはかつて世界中に散らばる、ただの占いの詞だった。
けれど組織が集め、力に対する力として使えるようにした。今は『コトダマプログラム』という〝形式言語〟として成立している。
僕みたいな権限なにも持ってない木っ端は挨拶のような何種類かの定型文しかもらってないけど、それでもこういう精神汚染への対抗手段として使える。これがもしサキュバスのやってくるような形の精神汚染ならおそらく無理だった。融通が効かないんだ定型では。
「く、そ！　これ以上の手だてが……！」
そしてこんな手は、相手が前後不覚で不明瞭な精神状態だから取れるもので。それも当座のその場しのぎが精々。
だって、サキュバスに抱きつかれて全身撫で回されてる所からどうにかできる手段ってある？　僕はないと思うな。
「あーん……❤愛くんが素直になってくれない……❤」
反物体が効かない時点でやられたも同然ではある。尽くせる手は尽くした。
あとはもう、サキュバスに対抗できる最後の砦。
「《精神の冬眠》」
精神汚染されて操られてしまうなら眠ってしまえばいいじゃない。
咲希さんは僕を殺さない。そう、僕は咲希さんを信用している。
巣に持っていっていくことは考えられるが、咲希さんという変成したてだからそれもない。だから、脊髄に埋め込んだ緊急用の麻酔装置を発動させる。
これで咲希さんはできることがなくなり、呼んだヘルプが僕らを回収してくれるはずだ。
「だめだよー❤❤おねんねはまだでしょ❤❤」
落ちかける意識に、一針の薬液が注射された。
「麻酔を、打ち消すっ……！」
いたちごっこ、あっちとこっちの手札の見せ合い……。
もう僕が手に取れる物体は、存在しない。
「愛くんはいっつも健気で可愛いね❤❤」
「やだぁっ……！　もうっ、このままじゃっ、咲希さん捕まっちゃうよぉっ……！　サキュバスになんてなったらっ、殺されちゃうっ！」
望みが絶たれると、涙が出てくる。悲しいというよりは、悔しい。
サキュバスなんて組織にとってみれば生かしておく価値がない。物体に対する組織の姿勢はよく知っている。だから……。
「ん～❤私はサキュバスじゃないよぉ～❤❤」
「さ、サキュバスだよっ。咲希さんは知らないかもしれないけど、その姿はサキュバスっていうのっ……！」
意外にも、対話ができる。

サキュバスは精神も人外のはずで、言葉は話しても会話が成立しない事例がほとんど……、というかこちらの意思を無視して自分のやりたいようにする、というような行動パターンと記述されていた。
……もしかしたら、もしかしたらまだ何かあるかもしれない。
サキュバスの魔力と結合しきってなくて人間としての自我が残っている、とか……。
「んふふ……❤」
咲希さんは意味ありげに、妖艶さを付随した笑みを浮かべ、僕の手をとる。
「……!?」
いや、おかしい。
サキュバスにも、咲希さんにだってこんなものはないはず……。
だって。サキュバスは、女性だ。雄がいない種類なんだ。そういうもの、という物体なんだから。
咲希さんがもしそうなら……?　いやそれはない、たぶん、きっと……。
「あのね、愛くん❤❤私の頭の中に声が聞こえるの❤❤」
〝それ〟が、胎動する。僕も持っている、〝もの〟。
「全てを犯せ❤全てを蹂躙しろ❤❤全ての人間を、〝孕ませろ〟って❤❤❤」
けれど僕の知っているのより、ずっとずっと大きくて、熱い。
そうだとは思いたくないけれど、そうなのかもしれないと感じてしまうほどに、圧倒的な存在。
「私は、『インキュバス』なんだぁ❤❤この、立派なおちんちんで、愛くんのこと い〜っぱい可愛がってあげる❤❤❤」
最悪な事態というのは、重なるらしい。
偶然にしては出来すぎ。そう思うくらいにセカイは僕を、僕らを酷な道へと追い込んでくる。いや。起こりうることは起こるって、言うじゃないか。なんて嫌な法則だ。それはつまり、物体と関わっている限りどんな可能性も内包してるってこと。
誰でもいいからこの地獄から僕を救ってくれ。ついでに咲希さんも元に戻して……。

ちゅぅっ……。んちゅ、れろっ。ちゅぴちゅぷ……。
キスというものは、なんとも何もできなくなってしまうものらしい。
全身を抱きすくめられて両耳を両掌で押さえつけられて真っ正面からされるがまま――抵抗しようとは思っているのだけれど、襲い来るピンクに脳味噌が屈服している――、口内の粘液を貪られるのは、堪える。
正気を保とうとするその糸を切らまいとする心が堪える。
「ちゅぴ……。んふっ、ほんとにキスに弱いよね愛くんは❤❤」
「……それは、咲希さんが自分がどれだけ美人かしらないからっ」

　仕方ないと言えば仕方ない面も、あるんだよ?
　僕だって好き好んで負けたくも慰みものにもなりたくもないのであって。
　咲希さんに、咲希さんからこんなことをされて、僕の本能がどうしても喜んでしまうんだから。
「えへー❤❤❤愛くんに褒められるのが一番嬉しい❤❤❤もっと褒めてっ❤❤❤」
　……たぶん、サキュバスとしての性質に自我が書き換えられてそれで本音が垂れ流しになってるんだと思う。
　かわいい。咲希さんは可愛いんだよ。
　僕だって男なんだから、美醜感覚だとか愛憎だとかそういうのは多少あるわけで。
　僕はやっぱり、咲希さんのことが好きだと思う。
「咲希さんは、可愛いよ。クラスのどんな女の子より、テレビに映ってるどんな人より……」
「むゆー❤❤❤言ってくれるなこのこの❤❤❤」
　でも、やっぱり今のこれは正しい関係だとは言えないわけで。
　咲希さんは僕が泣きそうな気持ちになってることに気がつかない。
「あはぁ❤❤❤もう辛抱堪らんっ❤❤❤」
　出来れば、セックスだってしたっていいから。その、付いてるモノですることだって……、咲希さんとなら……、構わないんだから。
「《愛くん私のこと好き》?❤❤❤」
　いつかに聞いた台詞を聞きながら、僕の、’表’の精神が休眠するのを感じた。
　どうせなら咲希さんと恋人なんかになってみたかったなぁって思った。

製品版ではこの間にあれやこれやがあります。

　わたし、ほんとうは、あいくんとこいびとに――
　咲希さんは、こう言っていた。
　目の前にいる咲希さんは、どう見ても咲希さんだ。
「……?　愛くん?　大丈夫?」
　外見から声から口調から、匂いから考え方に至るまで、全てが咲希さんそのものだ。
　サキュバスの精神に支配されていることを除いて。
「どうしたの?　淫紋、気持ちよくなかった?」
　サキュバスになるっていうことが、どういうことなのか僕はきちんとは知らない。ただ書類でざっと読んだだけ。
　あの刹那に見た咲希さんと今ここにいる咲希さんがどう違うのか。
　いや、確かにそれは″違う″らしい。
「サキュバスは……、寄生先の人格を″補食″するのか?」

そういう物体もないことはない。人格の乗っ取りは、それなりに多いインシデントだ。
「……違うよ。私は、石川咲希は、石川咲希だよ。私は、そうだと認識してるよ」
「うん。そういう風に聞いてる」
事前資料はそう言っていた。けれどあまりにも……、人格の乖離がある。
てことは、解離性の人格障害に似たものがあるってこと……?
そう考えれば対処はできないこともない、かな?
「サキュバスの咲希さんは、何がしたいの?」
なんで今咲希さんが僕の侵略を止めているか。
一つに、サキュバスではない咲希さんが僕に何かをしたから。
二つに、いきなり雰囲気が途切れたから。
サキュバスは、セックスに生きる物体である。だから、セックスをする気がない相手(大概は無理にでも気分を乗せるけど)には弱い。そんなことを資料で見た。
これが続くまでに何とかする方法を見つける必要がある。せっかく、最悪な精神汚染から戻ってこれたのだから。
「サキュバスじゃなくてインキュバスだから。……愛くんと、セックスをしたいけど?」
確かに。そういう行動原理の物体なんだからそういうことだね。
「……セックスできれば、それでいいの?」
「……うん。貴方のお尻にこれを挿入れたい」
僕の体は、磔に縛られている。咲希さんがやろうと思えば、なんでもできる。
目標設定を、明確にする必要がある。あやふやなままでは、漠然と逃げ出したいというだけでは、僕も咲希さんも良い結末にならないと思う。
ゆえに今こそ、理性的に対処せねば。
「じゃあ……。ここでしない方が、いいと思う」
おかしな話だけど、僕は、咲希さんの味方をしないといけない。咲希さんの希望を叶えてあげないといけない。あるいは、自分の体を犠牲にしてでも。
僕はこの期に及んで咲希さんのことが、好きだから、組織に咲希さんをこのままで引き渡すにはいけない。
「ここだと、もうすぐに見つかっちゃうよ」
催眠なのかもしれない。物体に操られた感情なのかもしれない。
けど、この気持ちを裏切ることは、僕はできない。
咲希さんほど僕のことを見てくれる人がどこにいるか。あんなに好きだって言ってくれる人がどこにいるか。
「咲希さん。僕を連れていって。なるべく遠くに。なるべく組織の目が届かない所に」
サキュバスの人格は、生殖欲に支配されている。それを満たすために自分の全能力をそそぐ。
それを満たしてあげれば、ある程度話の分かる物体、なのかもしれない。

　最終目標は、咲希さんの本当の人格の復元。それと、敵対状態を解くことだ。
　組織が物体の〝処分〟をしない時は、それが有用な時だ。ならば、咲希さんには聞き分けのいい使えるサ、……インキュバスになってもらう必要がある。
　そのためには時間だ。何かの拍子で戻ってくることも考えられるし説得も選択肢に入る。だから時間が必要なんだ。
「……その、セックスも、していいからさ。今は逃げよう」
「愛くん……。私……、細かいことよくわかんないの……。逃げた方がいい、のかな。セックスだけしていちゃダメ、かな」
「……駄目だよ。インキュバスの能力で、なるべく速く、遠く、見つからないようにしないと。組織の力も、忘れちゃったの?」
　まあ……、なぜまだ僕らが見つかっていないかわからないけれど。成っていないものは成っていないとするしかない。
「う……。たしかに、危ない気が、する……」
　一晩くらいは、逃げ切れるだろうか。
　僕の方から、来なくていいと連絡するべきかも。いや、ないか……。
　最悪、ここの会話も抜かれている。泳がされている可能性も十分ある。
　それならそれでその間に僕のやりたいことをすればいいけれど。
「逃げ、よっか。いくつか、隠密のための道具は、持ってたはずだから……」
「お願い。咲希さん」
　けど一つ思うのだけれど、これもストックホルム症候群って言うのかなぁ。僕にはもう、よくわかんないや。

「ここで、どうかな」
「……インキュバスってすごいねぇ」
　サキュバスやインキュバスは、セックスするために生きる存在だと言った。けれどその能力は、理性的な意志の元でなら相当有益に映る。要は、カタログスペックがいい。
　飛べるし人心掌握もできれば。幻覚を見せることもそれを使って自分を隠すこともできる。〝魔物〟だから、膂力だって人間なんて比ではない。
「す、すごい、のかな……?」
「咲希さん、色々持ってるしそれと併せればすごく強いよ」
「つ、つよ?　私は、愛くんとえっちできればそれで……」
　これだからよくない。僕をお姫様抱っこで運んでいるときもチラチラと僕を見てはため

息をついたりする。
「そんなにしたいの?」
　勘だけど、あんまり我慢させ過ぎると暴発する。
　僕の催眠が解けているのだってどうしてそうなのか、よくわからないし本気にさせるのはマズい。
　だからさせないということはできないし、そのうえ出来うる限り穏当にことを進める必要があるはず。
「し、したいしたい。魔眼が反応しないし愛くんの淫紋も動いてないし他の催眠も効かないし……。効いてたら、してるんだよ?」
　どうせなら元の咲希さんとしたいなぁ。戻ったらしなくてもいいかもしれないけど。
「しょうがないなぁ。いいよ――」
「――んっ!?　んんっ?!」
　お仕事の一環だけど。義務感は否めないけれど。
　イヤイヤじゃあないんだからね。
――
「僕さ、チェリーなんだよね。当然、バージンなんだよね」
　ほんとはチェリーじゃないらしいけど。僕の気分的にはチェリーだから、僕はチェリーなの。
　今度ほんとの方を咲希さんにあげたいな。あげられるかな。わかんないね。
「だ、大丈夫だよ。やり方、わかってるし。気持ちよくも、させられると思う。だって私、インキュバスだもん」
「その言い方、咲希さんの方が初めてさんみたい」
　僕が言えたこっちゃないけどさ。咲希さん、僕からキスされてすごく挙動不審。
　不安だなぁ。痛くないんだろうか。そういうの僕、全然知らないから。
　けど、僕に若干主導権握られておどおどしてる咲希さんはかわいいね。
「うぅー。だって私、初めてだもん。私童貞だもーん!」
「開き直らないでよ」
「からかってくる愛くんが悪いんだ。後で泣いても知らないんだから」
　……ほんとに大丈夫かな。だって今、僕はなんらかの作用で催眠が効かないらしい。純粋な、ノーマルな状態でするわけでしょう。
　ほんとのほんとに、痛くない?　不安になってきた。
「……僕、その、えっちの仕方とかなにも知らないんだけど。お尻って、痛くないの?」
「大丈夫だよぅ。だって愛くんたぶん、媚薬は効くよ?　それに気持ちよくないことはあっても痛くはしないよぉ?　えっちのことで淫魔以上に詳しくてうまい種族、いないし」
　実際問題として、エッチなことには技量が必要なのだろうか。
　そもそもえっちなことをするって、どういうことなんだろうか。

　そんなこともわからないのに、インキュバスに戦いを挑んで何か得られるものがあるだろうか。
「びやくって、気持ちよくなれる、お薬のこと?」
　咲希さん的には常識みたい。
「うん。《媚薬生成》。……錠剤タイプにしてみました」
「その場で作れるんだねぇ」
「インキュバスだからね!　色んな効果を出せるよ!」
　発情、敏感、鈍感吸収、オーガズムできなくさせる、などなど。らしい。
　向精神剤みたいなもん?　ナメないほうがいいかな。
「……効果はいつでるの?」
「んー。十分くらい。どういうのかは細かく言っても面白くないから、その時まで秘密ね、秘密」
　楽しみにしていてってこと?

「うっ、くぅぅっ……❤❤」
「お尻の中が、切なくなる薬……。効いてるかな?」
　ナメちゃいけなかったね。ていうか、えっちさせて現状維持から打開を図る作戦は、選択ミスだったかもしれん。
　僕の意志が持つかどうか勝負になる。腰の奥から湧き立つ痒みのような、期待のような熱。
　これを全身に回すと明らかに可笑しくなるとわかる。
「はっ❤はっ❤はぁぁっ❤❤きかなくても❤わかってるくせにっ❤」
「おねえちゃんわからなーい。人の初めてをからかってくる人のことなんてわかりませーん」
「い、いじわるぅ……❤❤」
　咲希さんの人格を戻すとか、そういうことをやっている暇があるか、どうか。
　僕じゃあないボクが知っていた、あの感覚とは別種の疼き。異なる、快感。
　直感だけれど……これは本来、知るべきではない需要の予兆。
「そうなの。おねえちゃんはいじわるだから、愛くんが素直になるまでこのままにしちゃうの。欲しいんでしょう?　これがぁ」

そろそろと、咲希さんの手と僕の手が重なって、それから腕が咲希さんの股間へ向かっていく。
「これを、ナカに入れたら、とおってもきもちがいいんだよ？　愛くんが感じている切なさを全部、解消してくれるの」
どきんと、心臓が跳ねる。動悸が速くなる。想像をしてしまう。
僕のおちんちんとは比べられないほど長くて太くて、熱い。
本能が、これには勝てないと言っている。堅くて血管が浮き出ている。先っぽが皮を破って矢のような形になっている。
「入るかなぁ。愛くんの処女穴に――」
お尻の甘さと共鳴してうっとりしてしまうほどの存在感を僕一人だけに握らせて咲希さんは僕を抱き寄せる。
僕は咲希さんの太ももにまたがった。
「――ううん。入るんじゃないよね、入れるんだよね。愛くんが自分から、これを受け入れるの」
「なっ、なんでそんな、ことっ」
「だって愛くん、すっごくドキドキしてる。私のおっきいおちんちんを触って、興奮してる。想像したでしょ。このカリ首が愛くんのもどかしさを引っ掻いていくところを」
人はなんで想像してしまうのか。想像してしまえるのか。匂いを嗅いで味を期待するのに似ているかも、しれない。
きゅーん、ってしてる。ちんちんの根本が刺激されたがってる。何かを食べたがっているんだ。
しかも想像すればするほど疼きが強くなっている。痒いのを通り越して痛みを伴った渇望に変わってきている。
「う、うぅぅ……❤❤挿入れたいなら、挿入れて、いいのに……❤」
催眠も、魔眼も、淫紋もなしでこれ。
……僕が戦う相手じゃない。
「私は挿入れなくてもいいよぉ❤愛くん次第❤」
吐息が自然と漏れ出て、温冷のわからない汗が吹いて、握っているそれの形を自然と確かめてしまうほど発情している。
覚悟を決めた以上、何をシても構わないとしていた。痛いのも辛いのも嫌だったけど、サキュバスに類する咲希さんがそうすることは考えられないにしろ受け入れた。僕が理性的に解決の糸口を探せればそれでよかった。
そう。理性的でなければいけない。
「ゆ、許してよぉ❤❤挿入れていいからっ！❤❤❤挿入れてぇ咲希さんっ！❤❤❤」
理性的でなければ、前も後も見えない。目的を果たすことができない。
「んふふー❤❤もぉっと懇願してよ❤❤心の底から❤❤❤」

「やだ❤❤やだぁ❤❤❤おかしくなる❤❤ぜったい、おかしくなるからっ❤❤❤」
　良くはないけど、僕の精神がこんな風に考えることができていない方がこんな苦痛は存在していなかった。もっと不安定なら、さっさと流されていればよかった。
　ぶれない理性が僕を苦しめる。
　巡って体に染み渡った血は僕のことを奈落へ墜とそうとする。
　崖の上に捕まっている僕の腕たる精神はいまだ諦めという境地に達することができていない。
「えへへー❤❤❤絶対言わせるんだからー❤❤挿入れてくださいおねえちゃんっ❤❤もう限界っ❤❤おねえちゃんのおちんちんがないと無理っ❤❤❤みたいなセリフー❤❤❤」
　つぷ、にゅるんっ！
「ひやぁっ!?　さきさっ、指、はいってっ!」
「この指はぁ、淫紋を刻むことも幻惑させることもできるけどぉ、淫魔にとって一番なのは、指先の感覚なんだよねぇ❤❤❤」
　くにゅくにゅ、にゅにゅにゅにゅにゅぅ。つぷんっ！　ずりっ、ずりずりっ！
「咲希さんやだっ！　ううぅぅっ?!　うへっ!❤❤いやぁっ!❤❤❤」
　突然、嬉しそうに、咲希さんは僕のお尻の穴にその指を突き立てた。
　爪の伸びた、長くて細くて、少しだけ骨張ったインキュバスの指。
　僕の中のどろどろになったところを、神経信号の受け皿が全てオープンになったところを、無慈悲に蹂躙していく。
　にゅっこにゅっこ、にゅくぅっ……。ちゅぽ、ずりずりずりずりずり……。
「おっほ❤❤ぉお……❤❤❤うあぁぁぁん❤❤❤」
「たのしーな❤❤❤愛くん愛くん❤愛くんのアナルは私のものぉ❤❤敏感とろとろでおねえちゃんは嬉しいよ❤私のためにこんなおちんぽに媚び媚びな穴になってくれてるんだよねぇ❤❤❤」
　気がつけば僕は完全に咲希さんに身を任せてお尻だけをヒクヒクさせながら咲希さんへ向かって突き出していた。
　腸の壁を指先で押し潰すように擦られるとそれは確かに僕の快楽が溜まった膿袋を潰して回る。だって僕には聞こえるもの。
　ぷちゅ、ぷちゅ、じゅわぁ……、
　っていうお肉の弾ける音が。そのたびに漏れ出た黄色に濁った膿が血に交じっていくのを感じているもの。
「さきさん――」
「はーい❤❤さきさんって言うのやめましょうねぇ❤❤❤」
　ちゅこちゅこちゅこぉっ！　ぬっぷぬぷぬぷぬぷぬぷ、かりかりかりかりかりぃ……っ。
「や、やだやだやだ!❤❤おかしくなる、おかしくなるのぉっ……!❤❤❤」
　頭が沸いて脳髄が溶け出すような狂う快楽を叩き込まれる。

理性がどうとか説得がどうとか、そういう相手では最初から無かったってことだ。
じゃあ、最初から諦めていたらよかったかって、それは違う。僕にやれることはやったはず……。
「う一❤❤うぅぅ……❤❤❤……お、おねえちゃんて、よべば、いいのぉ……?❤❤❤」
「そーそー❤❤私、おねえちゃんって呼ばれないと死んじゃうのぉ❤❤❤」
つくづく、情けないことだ。
この体はたった一錠の薬にすら負けてしまう。それではノーマルと何も変わらない。
いや、そもそも咲希さんの洗脳に支配された時点で情けなさの極みだ。
「や……、ぁ……❤❤おねえ、ちゃん……❤❤❤」
「う一っ!❤❤❤おねえちゃんだよぉ一っ!❤❤❤」
「くるしい、おねえちゃ……❤❤」
心が折れたのが、何かをやり遂げた結果だったらよかった。あるいはやり遂げられなかった後悔でもあれば、それはよかった。
達成感も後悔もなく、ただ性欲に溺れていくように屈服してしまう――

体験版ここまで

（作者が一番えっちだと思っているクライマックスの部分をチラ見せしています。）

「あ、あいくぅん……❤❤❤」
「ぅぉ゛……❤❤❤ぁ゛き゛さ……❤❤❤」
「あいくんっ❤❤あいくんあいくんっ❤❤❤えへへっ❤❤❤あいくんあいくんあいくんあいくんっ❤❤❤❤」
「ゃ゛……❤❤❤」
咲希さんは僕のなんだ。
恋人か。愛する人か。性の番か。
僕のお尻を征服しながら、僕のことをいとおしそうに抱きついて頬擦りする咲希さんは……。
「ゃ゛……、す゛、す゛ぎ゛、ぃ゛……❤❤❤」

「う❤❤❤うんっ❤❤❤うんうんっ❤❤❤すきっ❤❤❤あいくんっ❤❤❤あいくんすきっ❤❤❤かわいいすきっ❤❤❤だいすきだいすきっ❤❤❤」
「んにゃ……ぁ゛っ❤❤❤ん゛ん……❤❤❤」
　僕の……。
「ぼ、ぼくもぉっ❤❤❤すっ、きぃ❤❤❤うゃあ゛ぁ゛ぁ゛っ――!❤❤❤❤」
　世界がひらける。僕の位が一段階上に行ったような気がした。
　快楽を享受し続けたことで、咲希さんの精液を飲み込み続けたことで、僕の中の因子が呼応して進化したんだ。
　髪が伸びて、ピンクの色味と黒の艶を併せ持った。
　体がさらに、柔らかくなってそしてメリハリがあるものになった。明確に、ウエストとヒップが認識できるくらいに。
　雄を誘えるように。咲希さんをもっと誘惑できるように。いっぱい悦んで、精液を恵んでもらえるように。
　ただそれだけのために。ただそうして、そうすることが正義であるゆえに。
「あいっくんっ!?　まさかっ、さきゅ、ばすにっ……!?」
「うっ、ふぅ……。なんにゃ、こりぇ……❤う、うぅぅぅ……❤❤せいえき、ほしいのぉ❤❤❤おいしい、おいしいせいえきちょーだい❤❤❤さきさんのせーえきがいいっ❤❤❤さきさんのざーめんいっぱいいっぱいたべりゅのぉ……❤❤❤」
　まるでセックスをして、精液を接種することが僕にとっての一番のよろこびであるように変わっていた。
　実は変わり続けていた。段々、段々と僕の体は昆虫が成長するように変わっていっていたんだ。
「はへえぇん❤❤❤ま、まずいいっ!❤❤❤わたしっ、にんげんならっ、愛くんでも勝てる、っ❤❤❤のにっ、愛くんがサキュバスになんてなったらっなったらぁっ……!❤❤❤」
　ことここに来て、やっと対等な関係になれた気がした。
　対等に奉仕をする。対等にセックスする。対等に精液を、搾り取る。
　咲希さんの全部を。僕のものにする。
「さきさんのおちんちんもっ!❤❤❤さきさんのせいえきもっ!❤❤❤全部僕のものだっ!❤❤❤全部僕にささげればいいっ!❤❤❤僕が喰ってやるっ!❤❤❤えいっ!❤❤❤えいえいえいえいっ!❤❤❤う、ふぁぁっ❤❤せーえききたぁ❤❤❤おいひぃ……❤❤❤❤」
　だって気付いたんだ。咲希さんをどうにかするには、僕が強くないといけない。
　僕が弱いままでは、気持ちよくなるだけじゃ、ダメだ。咲希さんを助けられない。
　もっともっともっと精液を摂り続けて、そうして最良の結果に……。
「まだっ、まだまだまだだよっ❤❤❤だせっ❤❤❤ぼくにしろいのぜんぶだせっ❤❤❤」
　恋人のようにセックスに浸っていればいいのか?　否。

恋人になりたいのなら。愛した人を守りたいのなら。愛したままでいたいのなら。
僕が、僕の穴で、僕のおんなのこで、咲希さんのおとこのこと戦って、そうして勝つ。
かわいい咲希さんを、僕のことをかわいいと言ってくれる咲希さんを、何かに渡しやしない。
「ちょぉまっ!❤わたしもねっ?!❤❤射精するのにも回数制限があってぇっ……!❤❤❤」
今なら、下半身の感覚ならば手に取るようにわかる。
お尻の外側をぎゅっとすぼめておちんちんを扱き、お尻の内側は腹筋で包み込むように洗い。
射精した瞬間には咲希さんの気が緩んで抱きつくふりをして体を引っ張ると簡単についてくるから、僕が力を入れやすいような体勢にしていく。
上に乗って腰をくねらせて打ち付けて射精させる。キスをしながら正面で抱きつきつつ、お腹から力を入れて精液を搾り取る。
「はっ❤❤はぁっ❤❤❤はぁあっ!❤❤❤❤なんでっ、なんで愛くんこんなに強くなってっ❤❤❤」
不思議なことに、咲希さんの抽挿を受けてもへばらなくなっていた。
気持ちいい。気持ちよくて何度も、イっているのは確かなのに、それが全部セックスを継続するための餌になってくれている。
「ぼくがっ❤❤咲希さんのことが好きだからぁっ!❤❤❤咲希さんのわるいうみを、全部僕に渡すまで、僕は止まらない!」
これは、正しく力だった。
「ぐっ❤❤❤うぐぁ!❤❤❤にげ、にげないとっ……!❤」
「にがすものかっ!　うぅぅっ!❤うぅぅぅぅぁ!❤❤❤」
「い……!?　いやぁぁっ!?❤❤❤すい、すいとられるっ!?　なに、なにこれぇっ!❤❤❤」
願ったことならなんだってできる気がした。
咲希さんが腰を引いて僕から離れようとしたのを感じた瞬間、足が先に出て、咲希さんの腰にひっ掴んで、もう一度奥ふかくまで全てをいれる。
入れたり出したりするのでは不利だった。咲希さんに逃げられる。だから、入れたままで、ただそうしているだけで、精液を絞る方法を僕のお尻はあみだすことに成功したんだ。
「やめえぇっ!❤❤❤私のおちんちんっ、そんな搾れるものじゃ、お!❤❤❤でりゅぅうぅっ!❤❤❤とまにゃらにゃひぃいんっ!❤❤❤❤」
「ほっ、ほおぉっ❤❤❤うぐぁっ❤❤❤おかしくなりそっ……!❤❤❤で、でもぉっ……❤❤❤」
きっつくきっつく、中が真空になるまで締め付けて、その状態で出すのとは逆に筋肉が動く。

　無限に搾精できる。どっぽどっぽ精液を体に取り入れて、その度ぼくの力は増していく。
　人間では無くなっていっている気はするけど、僕自身から滲み出る雰囲気から僕が美しく、セクシュアルな存在になっていくのがわかった。
　そのことが結構嬉しかったし、同時に僕の自信のようなものにもなっていく。
「あはっ❤❤あはぁんっ❤❤❤ずっとずっとうごいて、咲希さんを僕の虜にしちゃえっ❤❤❤❤ふぐぅっ……!❤❤❤❤」
　おちんちんなんかに、負ける気がしない。
　おちんちんなんか、一発二発せーしを出せばそれでへにゃっちゃう。
　僕はきもちよくなればなるほど元気になれる。えっちになれる。
「あれぇ……?❤❤❤咲希さん、だんだんすくなくなってなぁい?❤❤❤だめだよぉ❤❤❤僕のためにっ❤❤僕の力のためにっ❤❤❤せーえきが必要なのっ❤❤❤」
　頭が恍惚になって、僕が僕じゃないようだった。
　咲希さんの精液を出しきって咲希さんの力を無くすことと、僕が精液を吸収して僕の力を増やすことの、線引きがあやふやになりかけている。
「あ、あぁっ❤❤❤おうっ❤❤❤うふぅ゛っ❤❤❤お、けほ゛ぉっ!❤❤❤❤」
　完全に、トリップ状態だった。
　お尻の気持ちいいのと、精液の気持ちよさと頭の痺れと、それと僕のお尻から続く管全てで精液を取り込もうとする体のおかしさが。
　完全に限界が近かった。
「け゛ほっ゛❤❤❤せ゛いえき、全部、僕のものぉっ❤❤❤❤」
　咲希さんの声も聞こえなかった。
「――ぁ゛❤❤❤はれ……?❤❤❤せーえき、あたらしいの、どこ……?❤❤❤」
　僕は完全に壊れているようだった。僕という人間の力じゃもう動いていなくて、どこかから貰った力が得る力を使って動いていた。
　気が付くと、僕のおしりには何も入っていなかった。
「せーえき❤❤❤どこなのっ……!❤❤❤ぼく、ぼく、もう、うごけなくなっ――」
　ただしく限界だった。すぅっと意識がどこかへ行っていくのがわかる。
「う、う……❤❤さ、さき、さっ――」

「うぅ……❤❤❤やぁ……❤❤❤さきさん、さきさぁん……❤❤❤」
　意識が乗っ取られた状態で正気を取り戻すと、状況判断に苦しむ。
「あぁ……。完全に愛くんと寝てんじゃん……」
　それ自体は今さらだしバレたらバレたでどうにもやりようはあったわけで。

　問題は私の股間に増えた謎の存在感と、頬を紅潮させたままうわ言を呟いて私の腕に抱き付く愛くん。
　それと愛くんの雰囲気が完全に、人間ではなくなっていること。
（……私は、サキュバス化を免れている）
　そうでなければ私という人格は戻ってきていないわけだけど。
「その代わりに愛くんがサキュバスになっちゃったかぁ……。……風邪引くよ」
　服がはだけていた。つんとした精臭はあったけど、愛くんの下半身は濡れていなかった。
「……？　女性器が、ない？」
　その辺に放ってあった下着を持ってきて、着せるときについでに見てしまった。
　サキュバス化は憂うべきことだけども、それはそれとして性転換した愛くんってのも趣があるわけで。愛ちゃんとレズプレイしたい。
　けど、まだ付いていた。元々勃ってないときは人畜無害おちんちんだったのにさらに幼児のようなものになってるけど。
『感謝しろよ』
「……何が？」
　考えても仕方のないことを考えても仕方がないからと今は愛くんの体調を崩さないよう暖でも取ろうかと考えていたところ、私にとってはまるで借金取りのように会いたくない、声が聞こえた。
『私が取りはからわなければお前もお前の思い人も死んでいた』
「……再契約していい？」
『しないわ。せっかく切れた自由、少しは楽しむさ。まあ、心配するな。私が欲していたものは手に入ったし代償はいらんよ』
　……本当かどうか。
　悪魔は、確定で自分に有利なよう接さないと、酷い目を見る。
『酷い目を見たのは、そこの少年だよ？　君』
「……愛くんに、何を？」
『知っているだろう。私は時の流れに合わせる形で事象干渉をする。″私が″酷いことをしたわけではないさ』
　じゃあ、誰が？　と聞きたいが、契約を切ってしまった今命令も何もない。
『くく……。詳しく語ってやりたいところだが、時間切れだな』
「時間？　……組織か？」
『組織、側の奴がやってくる。私は捕まるわけにはいかないから、またいつか会おう』
　悪魔というのにも色々な形態がある。
　いわゆる、精神体の奴が場を離れると空気の密度が和らぐように感じるのだ。
「組織……。逃げられは、せんか……」

　私はあれが気に入らない。そもそも、どこかの元でやるというのが性に合わない。
　青かった頃はギブアンドテイクができるなら、と思いながら盗みを働いていたがもう決定的に袂を分かつ存在だと決めていた。
「……せめて愛くんだけでも」
　すっかり桃色の体臭を漂わせるようになったこの子を、守ってあげなければいけない。
　足音が聞こえてくる。一人の、人間のもの。
「――潜り抜けたな。おめでとう。私は、君を歓迎しよう。私は君を、〝採用しよう〟」
　この声は。
「参った。降参。私は正気だし、そちらの探偵くんも同じ。今は寝てるけど……」
　対決すべき人間と、そうではないものってのがこの世界には存在している。
　自分を越えていてかつ話が噛み合わない相手には、恭順すべきである。
「分かっているよ、『インキュバスのお嬢さん』。君は珍しい存在であるし、何よりノウハウがあって優秀だ。組織は君を受け入れるだろう」
「ずっと、怪盗（シーフ）をやっていたかったね。組織の、エージェントさん」
　組織所属っていうのは、一定の信頼はおける。彼らは大体、正義に基づいて行動しているから。
　そういうとこも嫌いだ。こっちは、生きるためにやってるってのに。
「あぁ。そっちの彼と違って、君は自分の意思で怪盗であり続けている」
「あまり分かった口を利かないで頂戴。……早く、連れていきなさいよ。愛くんがお腹を冷やすから」
「そうだな」
　拘束する気は、ないらしい。
　愛くんのことを一瞥して、前を向いて歩き出す。私がおぶるってことか。
「そう。話しておかなければならないことがある」
　目覚めたら山の中だったけれど、ここはどこだろうか。
「君には、私の計画に参加してもらう」

「咲希さん咲希さん。これ、この前の報告書だから目を通してください」
「はいよ。……愛くんも、こんな普通な仕事をやっているんだねぇ」

何をもってして普通なのかは普通の職場で働いたことがない僕にはわからないけど、組織で働くためには文書作成も大事なお仕事。
「咲希さんもこれからはやるんだよ?」
「いやー、はは……。大学のレポートも大体道具でなんとかしてきたから……」
「ダメだよそんなことしたら。先生に迷惑かけちゃう」
まあ部署によってはもっとプロジェクト単位が大きかったりして、エージェントはエージェントだけやってればいいらしいんだけど。僕のところはね。
「ごめん、ごめん。身も落ち着いちゃったし、多少は真面目に生きるわね」
……まさか、僕だけじゃなくて咲希さんも無罪放免なんて。
僕はいい。元々組織の人間だしサキュバス化さえどうにかできればまたエージェントになればいい。そしてサキュバス化はどうにかできた。投薬と少しの〝リラクゼーション〟で、症状を寛解することが可能だった。
「真面目。咲希さんが……」
「私だってやろうと思えばなんとかなる。はず」
何年と組織を煙に巻きつつ、物体を扱う裏社会で生きてきた咲希さんが真面目に、組織の官僚主義についていけるか……。
「まあ、頑張っていきましょうね。僕も手伝ってあげるから」
「んー❤愛くんと一緒にやれば一万文字のレポートも一時間だよう❤」
「それ絶対適当でしょ」
えへへー❤とでれっとした顔で僕の肩に頬擦りする咲希さんはかわいいな。
「やー、愛くんと一緒に仕事するのこんなに楽しいならもっと早くこうしてればよかったなー❤」
「催眠までしてたのに」
曰く、僕のことはすごく好みだったけど組織のことが好きじゃなかったからあんな形で遊んでいたらしい。
「下手な意地だったんだよぉ」
「僕の純情を何だと思ってたんだか」
少し拗ねて見せるけど、確かに好きな人の隣にいられるってことの楽しさ幸せはこうしてきちんと体感しないとよさがわからなかったかもしれない。だから、怒ってなんかいないさ。
僕にとっては僕を好きだって言ってくれるその気持ちだけで、全部許せちゃう。
「僕のこと……、ほんとに好き?」
「好きぃ❤愛くんすきすき❤」
「……ありがと。僕も、咲希さんのこと好きだよ」
感極まってキラキラした瞳でキスをせがんでくる咲希さんがそこにいたりしちゃって。
おでこにおでこを当てて、そしてから口を合わせちゃう僕もいたりしちゃって。

　この事務所に越才さんがいない、僕たちだけだからできる接吻。
「えへ、えへへへ……❤❤愛くん愛くんっ❤❤」
「ん……❤咲希さんはかわいいね❤」
「ありがとぉっ❤❤」
　半身で抱きつきあって、体をすり付けて、頭を撫でて、完全にアホなカップルの体だ。
　僕らの社会的な立場がこうすることを遠ざけていただけで、ただの人の関係だったらもっと早くにこうなっていた。そう断じれるほどに、僕らは相性がいい。
「……今日だけど、まだ解放しちゃだめだよ」
「も一野暮言わないでよ。わかってるって一」
　そもそも、もう恋人であることを推奨される関係なのだけど。
　僕も咲希さんも溜まると、我を失うから定期的に出すなり出されるなりしないと人としての活動ができない。
　薬でおさえつけるのは耐性の問題もあるしどんどん膨らむタイプの衝動だからそれだけに頼るのは難しい。
「でもさでもさ、仮眠室あるんでしょ？　使っちゃダメなの?」
「越才さんに悪いじゃん」
「むしろ聞かせてやろうよ」
「セクハラか公然わいせつで訴えられる……、あれ。そういえば、越才さんって女の人なんだっけ?」
　あの人と全くプライベートで関わりがない。容姿から声からファッションまで全て中性的。
　長いこと付き合ってきたのに、そんな基本情報を知らない。う一ん……。
「……女の人なんじゃないの？　結構小柄だし」
「いや、確証がないなぁ」
　今さら、僕は越才さんのことをほとんど何も知らないことに気付いた。

作者あとがき

こんにちは、作者のあーかんそー州です。つらつらとあとがきを書いていきたいと思います。

とは言ってもこのあとがきは本文を書き終えた二ヶ月後の発売直前に書いておりまして、作品に対する姿勢は読者の皆様とあまりかわらないというか、ある種他人事ののような面持ちでこれを書いております。なにせこの小説を初めて読み返して校閲にかけたのは半月前ほど。続編すら書いているくらいですからそれもまた当然のごとく。

さて作品についてですが。

コンセプトとしては　おねしょた+催眠もの+探偵怪盗もの+某SF的世界観+サキュバスものに私の性癖プレイをぶっこむ　みたいな感じでした。執筆難易度が高くて大変でございやした。その甲斐あってけっこう自信作になったのでよかったです。感想お待ちしています❤

SF要素はこのあとに収録している作品が元になっていて割りと色々世界があるのでそちらもご覧いただければ幸いです。

言ったとおり続きも書いてるので(そもそも続編ありきだったとおもうので)完成した時にはまたお目にかかりましょう。

あんまり長いあとがき書いてもしょうがないと思うので今日はこの辺で。普段はツイッターとかにいます。あとは表紙を書いてくれたイラストレーターさんにバトンタッチしましょう。

体験版を読んでいるあなた!

ふたりのえっちのえは製品版の中にこそあるぞ!　物語として成立させるくらいには残しているけど物語の本質に迫る部分は製品版にあるぞ!

どうか製品版をよろしくお願いします!

ツイッター：https://twitter.com/akansosyu1

pixiv：https://www.pixiv.net/member.php?id=8233209

fantia：https://fantia.jp/fanclubs/5607

　イラストレーターあとがき
　表紙とキャラデザを担当させていただいたあーかんそー州です!!　これー回やってみたかったんですよね!!
　本当は挿し絵も書くことになっていたのですが諸事情でぼつんなりました。
　諸事情っていうかぼくの自信不足です!　小説に合うだけのあれがあれで……。
　次はくびになっているかもしれません。それもよいことです。二足のわらじは楽しくないことはないけどしんどくないこともない。
　あと愛くんのキャラデザもしてあるし直前まで表紙にもいたんですけどいなくなりました。私が描いてる限り公開もしないと思います。しない方がいいと直感が訴えてきます。
　最後に。
　絵よりロゴの方が自信があります!

同時収録：物体がセカイを掻き乱す　エピソード１　体験版

イントロダクション~セカイへの導入~

　世の中には、様々な"物体"が存在している。
　死ぬと世界が巻き戻る人間。眼で見て耳で聞いたものが数値で理解できる人間。読めばたちまちゾンビになる本に、どんな鍵穴でも開けることのできる鍵。
　前までだったら、嘘だと断じていたが、今は違う。
「おい、パスワードだってよ」
「……指紋付着パターンを解析する。時間、少しかかるから待って」
　なんなら俺だってそんな変な物らと同類だったのだから。そんな便利な能力でもなかったが、まあ何、それなりに楽しく"組織"でお仕事させてもらってるから、文句はあまりない。
「……解けた。16 桁はさすがに、大変」

「ありがとうね。さ、早く行くわよ」
　拳銃を持つような仕事ではあるが、人を殺す羽目にはなってない。……いや?　ゾンビの時に殺してるのはありゃ殺人なのか?
「あちゃー。手遅れね」
「うわっ、なんだこりゃ」
　俺の視界に飛び込んできたのは、この世の物とは思えぬ惨状で、そしてこれは世界を滅ぼしかねない物らしい。
「ま、たぶん時間の問題だけでしょ。出直しよ」
　仲間の一人が、手に持っている拳銃を自分のこめかみにあてがう。弾丸は込められセーフティも、勿論外されている。
　銃声が一つ、鳴り響いた。

プロローグ

　俺、新橋　平（しんばし　たいら）は目の前に幼馴染みの女の子二人が歩いていることを確認すると、少し体が強張ってしまった。
　現在時刻は朝、通っている高校へ向かうために玄関の扉を開けたところだ。
「おはよう」
「……おはよう」
　二人のうち背の高い方、志木　佳菜（しぎ　かな）に声をかけられる。同い年で、学校も一緒なはずであるが、なぜか校内では顔をほぼ見ない。一応それなりの人数がいるから仕方ないかとも思うのだが。
　家も、近くないはずであるが朝には時々こうしてばったり逢うことがある。そのたび、志木から一言挨拶をされ、そのまま去っていく。なんとも言えぬような距離感を保たれているのだ。昔のように親しくしたいとは思うのだが、向こうにその気がないのかもしれない。と勝手に思ってしまっている。
　背の低い方はちらとこちらを胡乱げな目で見るだけで何も言わない。名前を豊支　宇多（とよし　うた）、一つ年が下で、特徴的なのが髪の色だ。真っ白なのである。思い起こすに、幼い頃の彼女は普通の、日本人らしく黒色だったはずである。
「……おい」
　いつもは挨拶だけで済まし、ため息をつくだけなのだが、今日はなんとなく、本当になんとなく声をかけたくなった。

「……なに？」
「久しぶりに……そうだ、一緒に歩こうぜ。同じ学校だろ？」
「……そう。いいけど、あなたと一緒に学校へ行ったときが今まであったかしら？」
　志木は宇多の方をちらりと見てから、言葉を返した。
　そしてその問いに記憶をまさぐるも、特に思い当たる時がなかった。
「ないかもしれないが……。いや、お前らと遊ばなくなったのって小学校に入るより前だろ。誤魔化すなよな」
　思わずため息混じりになってしまう。
「誤魔化すつもりは、なかったのだけれど。……立ち話をしていると遅刻するわ、行くなら早く行きましょう」
「おうよ。宇多もそれでいいか？」
　俺はやはり見つめてくるだけで何も言葉を発さない宇多へ確認を取る。
「あー、なんていうかね、色々あってあんまり喋ることができないのよ。勘弁してあげて」
「おっとそうなのか。そりゃ悪いことをした」
「……いい、よ。ひらにい」
　唐突に幼児期に呼ばれていたあだ名を出され、宇多が喋ったことも含めて一瞬、面食らってしまう。
「……。　じゃあわたしも新ちゃんって言った方がいい？」
「やめろやめろ、もう１０年以上も昔だぞ」
　そこまで言って俺は、二人のことをそれぞれなんと呼んでいたか思いだし、赤面してしまう。
「ひらにいも、あの頃と同じので、呼んでほしい」
「おいおいそれこそマジで勘弁」
「新ちゃんも冷たくなっちゃたねー」
　宇多は小さく頷くだけだ。
「久しぶりにこんな話したと思ったらこれかい。こんな人をおちょくる性格になってたとはな……」
　高校までの道を歩きながら、それでもと思う。この二人がしっかりと育っていてくれいて、こうしてまた話すことができてよかったと。

　夢を、ときどき見る。
　ただの夢じゃない。見ているときは現実だと信じて疑えない。それほど世界ははっきりしている。五感があって当然痛みもある。
　起きてからそれが夢だったのだと自覚するのだ。それは決まって夢の始まりと同じ時間の起床で、正夢だと見紛うほど忠実に日常は進行していく。全く同じ正夢のままに夢の続き

が現実になることもあれば、どこかの時点から夢とは違う現実が続いていくこともあった。
　夢の内容は、たとえばたくさんの人を巻き込んだ通り魔が現れたとか、隕石が海に落ちてそれは実は隕石ではなくUFOで中から宇宙人が現れた、とか。そういう荒唐無稽な事件をニュースで知るというものが大半だ。が、夢なのだから何が起きてもおかしくはあるまい。
　幸か不幸か、その不思議なものに巻き込まれたことはいままでにない。いや、住んでいる街全体に毒物が散布される危険性がどうだとかで市外に避難したことはあるが、その毒物に出くわしてはいない。
　やっかいなのは、夢の中の夢、なんていうのも発生することだ。朝起きて夢だったのだと自覚して、その日を送っていたらそれも夢だった。……これが１０回２０回と続いてしまうとしたら色々と耐えきれないものがあるが、たいていは２回３回で終わる。
　この夢はずっと前から俺の日常になっていた。頻度はまちまちだが月に一回は来る。子どもの頃からずっと。
　いや、たしか明確に始まりがあったような気がする。あれは志木と宇多が……。

　古今東西、種々雑多な本が並べられている。そこで施設の職員が、蔵書の確認、整理を行っていた。
「破れてるじゃない。まったく……あら？」
　もう基本的に人前へは出さない本のところで、本棚の奥に一冊、押し込められたかのように背表紙を向けてはまっていた。
「洋書……？　いや英語じゃないなこれは……」
　その職員は元来本が好きで、この職場を選んだのである。だからこそ、洋書を取り扱うことも考えて学生時代苦手だった英語も頑張って勉強した。だが、その本の表紙に書いてある文章が、読めない。
「まさか、掘り出し物？」
　施設のものであることを示す貼りものがなく、紙も相当昔のものであるらしい。よく普通の書庫で状態が保てていたものだ、と一人ごちる。
「うわぁ、手書きじゃなイ。これガあれば給料モもットあガってシアワセなくらクラクラクラ……」

『世界を滅ぼす本』

　目の前に広がるのは、体が溶けて骨まで剥き出しになった少女と、うずくまり悲鳴とうわ言を繰り返す少女。俺は、何もできない。どうしようもない。幼かったから？　違う。
　今でもたぶん、何もできない。
「どうして。どうしてこうなった。どうし――」
　そこでセカイが、途切れた。

　――夢を、みていた。
　例の現実感がある奴ではなくて、人間が生理現象として見る方の夢らしい。内容は思い出せるが前後が不覚で、何より昨日普通に寝床へついた記憶がある。
　時々あの夢を見る。それは幼い頃に志木と宇多とそれに自分が変な生き物に襲われているもの。……あれは紛れもなく、夢だ。なぜなら３人とも、生きているのだから。
「寝汗かいてんな……」
　背中がじっとりと湿っている感覚。気持ち悪い。
　そこで思考を断ちきり、携帯の時間を確認する。１１時を回ったくらいだ。着信履歴が何件か……後で見よう。
　汗を流すために自室から出て、風呂場へ向かう。
　途中リビングを通るが、誰もいない。テレビだけが一人、動いている。
『……市全域において市民による暴動が発生中！　市役所が占拠され他の公共施設も……！　ただいま入ってきた情報によりますと市へ繋がる道全てを警察と自衛隊が共同で封鎖、市との境界線も暴徒が出入りをしないかレーダーやヘリコプターを用いての監視中であるとのことです！　繰り返します！――』

テレビは狂ったように大声を張り続けている。しかしその本物とは違う、少しボケた音に滑稽さを感じた。
こんなにも静かな昼前。騒いでいるのはテレビだけ。なんだか無性におかしくなってくる。
……笑っているわけにもいかず俺はポケットから携帯を手繰り寄せ情報収集をすることにした。
目的の情報にたどり着くまで時間はかからなかった。今日のトップニュースだ。関連記事までそのことで埋め尽くされている。
「……ゾンビだと？」
ネットに検索をかける限りでは、どういうことだか知らないが、俺の住んでいる街がゾンビ的な生き物によって埋め尽くされているらしい。
「午前９時頃には目撃情報多数、１０時頃にはパンデミックのごとく市全域にそのゾンビになる病原菌だかが拡散……」
SNS、掲示板、動画サイトに検索をかけた限り、やはりそれで間違いはないみたいだ。
着信履歴を見ると、避難警報が発令されている。市内の見知り合いにもメッセージなりを送った、が、SNS はある時を境に更新を止めた奴ばかりだ。それまではこの騒ぎを怖がるなり楽しむなりしていたのに。
ありえない。だったらどうして、俺はまだ人間のままでいられている？　というか、家族が逃げるために起こしてくれても良かったんじゃないか？
「誰もいない……？」
一人っ子であるが、両親は健在だ。今日は休日であるからには二人ともリビングにいないならキッチンなりどれかの部屋なりにいるもんだと思っていたが、もぬけの殻。
テレビには、市の境付近でゾンビと化した市民と防衛戦を張った自衛隊が揉みくちゃになる映像が流れて……うわ、盾を素手で飛ばしおった。
『速報！　速報！　――総理大臣が非常事態宣言を表明！　加えて国家緊急権の行使、自衛隊の……発砲許可！　現在の防衛線に限りの発砲許可を……』
「国家緊急権ってなんだよ……」
初めて聞いた名称だ。……なんでも、国家が超法規的に権力を行使できるそうな。
「市街には防衛線、森にはヘリコプター……」
さっきまでゾンビに押し込められていた自衛隊が発砲許可が出たことを知って反撃に出ている。恐らくヘリの方もこんな風に問答無用で発砲するのだろう。
「自力では出られない。すると１１０番でもして助けをもらうのが一番……」
俺は、そこでふっと脱力感を全身に感じた。
果たしてこれは現実なのか?　夢なのかもしれない。いや、百パー夢だ。真面目に考えるのが馬鹿馬鹿しくさえなってくる。
「とりあえず寝汗を洗ってからでいいか……」
それはもしかすると一種の現実逃避なのかもしれない。家の中はこんなにも静かで、騒が

しいのは液晶の画面の中だけ。
　むしろ世界が俺という個人に対してどっきりを仕掛けているんじゃないかと云う考えすら思い浮かぶ。

　シャワーを浴び体もきちんと洗い、体を拭いてドライヤーで髪も乾かした。
「着信一件……」
　今時あまり使わなくなった携帯のメールボックスに入っている。
「志木からか」
　昨日、メールアドレスの交換だけやっておいた。古風な気もしたが、あまり親しく連絡を取れないらしい。取りたくないのではなく、取れないらしい。
「家にいる、と」
　一斉送信やらを駆使して無事かどうか確認する文面を送っていた。返ってきたのは遊びもなにもない、今どこにいるの、という一言だけ。
　喉が乾いたから水と、冷凍してあった食パンを温めて何枚か、何もつけずに食べる。
　水で流し込んでいると返信が来た。学校の裏口で待っているから来てとのことだ。警察か自衛隊に助けてもらわなくていいのか、と打って返す。まだ外を見てないけどゾンビで一杯なんじゃないのか。
　返事が遅い。携帯と双眼鏡を手に持って二階の自室へ向かい、窓から覗く。……うーん、こりゃ本当にゾンビとしか形容できないな。肌が土気色で目ん玉が飛び出してるのもいて、虚ろなままに徘徊している。
　こんな映画かゲームのような光景に俺は思わず双眼鏡を見いってしまう。と、携帯に返信が来たようだ。
「生き残りにも病原体が入り込んでいる可能性があるから、生存者を含めそのうちに街中で掃討作戦が開始されるって……」
　おいおいマジかよ。どうしようもねえぞそんなの。
　ならお前は逃げないのか、と返した。すぐに返ってくる。そのために集まるんでしょう、かたまった方が生存確率が高い……。
「それもそうか……？」
　相手も自分も肉壁が増えて嬉しいって感じかなぁ。随分と物騒な発想だが。
　曰くゾンビたちは生き残りのことをしっかり追いかけてくるそうだ。だが、お決まりで足は速くない。だから物干し竿でも持って厚着して近づけさせないように走っていれば大丈夫、らしい。
　ベランダから洗濯物がかかっているそれを無造作に抜き取る。大きな音がした。
　あ、音に反応するとかあるかもなのか。
　一応の武器は手にいれたから強気に外を見る。何体かのやつがこっちを見ているが、やがて何もなかったかのようにまた歩き出している。

　ホッとして、今度は静かに玄関へ向かう。玄関には靴が何個か並べられていたが、ここで事件でも起きたかのように乱れ、赤黒い何かが飛び散っている。
「……行くか」
　死体を見ずに済んだのは、ある意味幸運だったのかもしれない。
　ドアをゆっくり開け、外の様子をうかがう。住宅街だというのにうーだのあーだの言って人が行き交っている様は中々に壮観だ。
「よし」
　小声で気合いを入れ、比較的ゾンビの密度が少ない方へ向けて走り出す。物干し竿は地面と水平に、進行方向とは斜めにして、いつ襲われても棒で叩けるよう準備している。
「あれ……？」
　てっきり、道に出た瞬間、そこらにいる死体たちからさながらスプラッター映画みたくー斉に襲いかかられるものだと思っていた。が、なんてことはなく、すれ違っていくだけだ。
「むしろ避けられてないかしら」
　そのことに気づき、警戒心を持ちながら辺りを見回していたが、緊張しているのが途中でアホらしくなり武器を下げた。伸縮可能の竿だったから、一番短くした。
　ゾンビたちは俺のことに気づいてはいるらしいのだが、近づいてくるどころかむしろ遠ざかろうとしている。結果、一度もお互いに触れていない。
「匂ってないはずなんだけどな……」
　思わず服を嗅いでしまう。しかし、辺りに肉が腐った臭いが充満してる時点で俺の体臭なんて関係ないはずで、むしろこんな状況でそんなものを気にする方がおかしいわけであるが。
　普通に歩いても大丈夫だ。ゾンビハザードってこんな余裕なものだったかしらね。

　通っている高校の正門まで来た。ゾンビたちはもう俺にとって、いつもすれ違う名も知らぬ人たちと同じようなものだ。多少数がおおくて多少見た目が気持ち悪くて変な臭いがするくらい。
　裏口で待っているとか言っていた。職員玄関に使われていたはずだ。
　なんて考えていたら、ポケットのなかでバイブレーションが鳴る。
「裏口にあるはしごから屋上まで登ってきて、ね。なるほど」
　ゾンビに襲われてなくて良かったね、というような文面もついていた。楽でよかった、と返信しておく。
「初めて使うわこのはしご」

角形のある程度の高層な建物なら大体ついてる気がするあれ。ひそかに登ってみたいと思っていたような気がしないでもない。
使ってみた感想であるが、下をすごく見たくない。高所恐怖症ではないけどこれはすごく怖い。股がスースーする。
筋肉がかなり使われたような、筋肉痛が起こりそうな感覚と共に登りきると、倉庫かなにかは知らないがともかく近くの壁に志木がもたれ掛かっているのが見えた。
「やあ、ゾンビの黙示録の生き残りに出会えてぼくも嬉しいよ」
「……はぁ。詳しい話は中で言うから、ついてきてちょうだい」
「へいへい」
一瞬なにか憚られるらしいことを言おうとしたらしく眉を寄せたが、ため息一つで済ましてしまった。
素直に校内の階段に繋がるらしきドアへと志木の後ろについて歩く。
「あなた、今まで何か自分が変だと思ったことってない？」
校内は大丈夫なのかと見回してみると、防火扉がかなりの数閉まっている。というか一本の道のようになっていて、案内がなくても歩けそうな感じだ。向こうからカンカン音がしているからおそらくは、そういうことなんだろう。
「変っていうと？」
「……特殊な力が使えたり自分の身の回りだけ妙だったり」
「至って健康体で過ごしてきたけど。妙なことねぇ……」
特殊な力はともかくとして妙な方は心当たりがある。あの夢だ。本当に夢なのかすらわからない、目が覚めてからやっと判明する。
実際、今のこれも高確率で夢なのではないかと睨んでいるが。にしてもケガをすれば痛いし犯罪をすれば心が痛む。それにもしこれが夢じゃなくて現実だったらやばいから普通に行動すればこう行動するだろうというものをトレースするつもりで動いている。
「そういうお前はなんかあるのかよ？」
夢ならばなにが起こっても不思議ではない。今ここで志木が、実はわたし、重力系能力者なの、とカミングアウトしてきても大して驚かないし、実際にその能力を使われたとてそれは同じだ。
まあ、これが夢だと自分の中で結論付けることになるのは間違いないだろうが。
「……着いたわ」
答えを聞く前に到着してしまったようだ。職員室、それとブレーカーが置いてある場所が隣接されているところ。
担任と話をするために何度かは入ったことがある。作業机みたいのが何個も並んでて、壁にはかなりの数の紙が貼られている。
そこそこ広いその空間の中にいたのは二人だけ。一人は宇多。棒状の固形の、ちまたでよく見る栄養食を食べている。もう一人はスーツを着てその上に白衣というなんとも奇抜な

格好をしたボサボサ頭の男。なにやら二人で内緒話をしているらしい。
「あの人は？」
「私とあの子、実はどのクラスにも入らずに勉強してるんだけど、それの担任みたいなもの。鴻巣　仁（こうす　じん）っていう名前よ。あぁ、先生でもなんでもないからさんとか先生とかつけなくても構わないわ」
　ほーん、と生返事しておく。しかし、どのクラスにも入ってないってのは初耳だ。そんなものがあるというのもまた。まあそれなら今まで学校の中でこの二人とまったく顔を合わせなかったのも納得できるが。
「そう、先生でもなんでもないのにこの二人の担任をやってる鴻巣だ。よろしくな。えーと……」
　宇多との話が終わったらしく、鴻巣とやらはこちらに向かってくる。
「新橋です、新橋平」
「そうそう新橋くんね。あぁ、敬語じゃなくていいよ。こう見えて大学は出てるけど教員免許は取ってないから。本当の意味で先生でもなんでもない」
　握手をした。身長は、成人男性平均ど真ん中の俺よりも少し高いくらい。いや、猫背っぽいからもうちょっとあるのかもしれない。
「よろしく……お願いしますはいらないのか。……えっと、逃げるんだよ、な？」
　ちらっと顔色を見たが、本当に敬語はいらないらしい。
　しかしそれにしても、だ。今更ながらこの３人を見ていると、ゾンビの危機が本当に起こっているのか疑わしくなってくる。冷静すぎだ。
　順繰りに顔を見ていくが全員飄々としたもので、休みの、人が少ない職員室を使って話しているだけのような……。
「逃げる？　ああ、そういう口上で呼び出したんだったか。違うよ。詳しい説明は……志木さんがしたら」
「はいはい。えっとね、端的に言うと、これの原因を突き止めにいくの」
　今なんと言ったかしらこの人は。突き止めるて。英語で単語習ったな……ろーけいと……。
「全く意味が分からないって顔をしてるね。だけど、確定事項なんだ。やってもらわなきゃ困る」
　鴻巣とやらはいまだ事態を飲み込めていない俺に向けて、志木の言葉を繋ぐ形で言い募る。
「いやいやいや、なぜそんなことを。元から断って警察や自衛隊の発砲をやめさせるとか、そういうところか？」
「あの発砲許可を出させたのが、私だと言ったら、どうする？」
　それこそ意味が分からない。性質の悪い冗談だ。
「茶化さないでもらえる？　本当は今でも新橋のことを巻き込みたくないって思ってるんだから」

志木は睨みを効かせながら鴻巣のことを叱る。
ああ、茶化しだったのか安心した……。
「でも、今から私たちでこの事件の大元を探りにいくのは本当なの。こればっかりは……仕事だから、ね」
「ま、マジで言ってますか。その口振りだと俺もついていかないとダメみたいな……」
「ここに君がいる時点でそれはやってもらう。ま、事が済めば全部話すしちょっくら頑張ってきてよ」
そんな、志木の奴は仕事だと言うし、このわけわからん奴はちょっくら頑張ってこいだのまるで緊急で短期のバイトが入ってきたみたいな言い方で……。
「う、宇多。お前は嫌だよな？　あんなゾンビの群れに自分から突っ込んでいくなんて……」
机の上に腰を下ろして昨日と変わらず眠そうな目でこっちを見ていた宇多が歩いてくる。
「いっしょに、がんばろう？」
なるほど俺は覚悟を決めなきゃいけないのか、と自分に言い聞かせた。

「突き止めにいくって言ってもあてはあるのか？」
やはりこいつら、本気らしい。理由は、今はまだ教えられないとのことで、俺がここに残るのも許されないそうだ。誰が許す許さないを決めるのかいまいち分からなかったが、ついてこなければなにか俺の身に大変なことが起こるらしい。志木や宇多が言うんだからまあ、ハッタリではないのだろうとこれまた思い込む。
「豊支さん」
「あっちの方」
以下沈黙。一応宇多は明確に街の……市役所とかがある方角を指差している。
「えっと、それだけ？　っていうか根拠は？」
「……直感？」
「それだけっていうのは原因がどこにあるかのあてのことかい？　確かに、これだけだね。なにか問題でも」
鴻巣と宇多は揃って表情に乏しい。けれどこれまた揃って困惑したような顔をしているからこっちとしてはおちょくられてるんじゃないかと考えてしまう。
「志木、大丈夫なのかこれ」

「あー、まあ最初はそう思うだろうけど、平気だから。あっちはともかく宇多ちゃんのことは信じてあげて」
　むろん、あっちとは鴻巣の方を向いて言ったわけであるが。普段からこういう態度を取っているというわけか……。
「信じて、ね。……わかった、もう疑うのはやめよう。それなら、俺がなにかやれることはあるか？」
　こんなすっとんきょう、夢であることを願う他ないぞ。
「やれること。君、ゾンビに襲われない体質みたいだね？」
「体質ってことは皆やっぱり映画のようになってるってことか。……俺が特別なのかは知らんが、まあ、そうだな」
　非日常のはずなのに一定は日常とあまり変わらない、妙な気分に襲われていた。
「であるならば、いるだけで、助けになるわけだ。わかる？」
「なるほど。了解した」
　このちょっとトゲを刺す言い方も、もう気にしないことにする。
「じゃあもう行こうか。屋上から一番近い車ってどこ？」
　言いながら鴻巣は廊下に出る。志木がすぐ反応して、宇多はそれについていくという形で、俺はいきなりだったから出遅れた。
「駐車場以外にってこと？　知らないわよそんなの」
　どうやってこの防火扉でルートを作ったのか知らないがともかく鴻巣と志木は早歩きで屋上まで向かっている。
　俺は宇多のとなりだが、どんどんと離れていってしまう。
「なあよ、宇多。お前、なんでゾンビの発生源の場所なんて分かるんだ。ほんとに勘なのか？」
　そんなことに普通勘は働かない。エスパーでも、ゾンビ大量発生の源はどこですかと聞かれれば、何を言っているんですかあなたは、と返されるに違いない。
「……ほんとは違うけど。ねぇひらにい。久しぶりに手、握って？」
　いきなりの告白。俺は面食らう。
　思わず宇多の顔を覗くが、そこにあるのは感情の見えない静かな瞳のみ。
「……いいけど、ほら」
　俺は少しの葛藤の後、手を伸ばした。ヒヤリとした五つの指が俺の手のひらにそえられる。
　そういえば、小さい頃の宇多は本当に小さかったから転ばないようによくこうしてたっけな。と、考えるとそんなに恥ずかしくないから不思議だ。状況が状況でもあるのだが。
　前に触った手よりはずいぶんと大きくなってることに変な感心を覚えるも、握って言葉が止まってしまった。
　変な誤魔化され方をされたかなと思う、が、宇多の手がそこで強張った。
「平にい、これ。いや……」

「どうかしたか？」
　顔を覗くと、なんだか表情がキリッとしている。ついさっきまで寝起きと言われても疑わないくらいの無気力感だったのに。
「なんでもない。……やっぱり手、離すね。こんどまた、にぎって」
　すぐに離されてしまった。ゆっくりとだったから拒否ではあるまい。なにより宇多から言ってきたことだ。
「……おう。言ってくれれば考える」
　それからは二人して無言になる。俺は頑張って色々なことの整理をつけようとしていた。女の子と手を繋いだというのに一切浮かれることのできないこの状況はなんなのだ、と。
　……いつのまにか屋上のドアまで来ていたらしい。見れば端の柵に手をかけながら二人が相談しているらしい。
「よし、新橋くん。このキーをもってちょっくら、あの車まで走ってくれ」
「……いいけど、車の中に何かあるのか？」
　手渡してきた鍵は今時分珍しい本当に鍵として差す奴だった。飾りもなにもついておらず、大分不格好に見える。
「いや、そこまで運転してきてくれ」
　指さしをはしごの下まで持ってきてそう言う。
「……免許持ってないけど？」
「大した問題じゃないさ。無法地帯なんだから」
「無茶を言うなあんたは。ぶつけても知らないけど？」
「その辺も大丈夫だ、あれ自分の車じゃないから。持ってきてくれさえすればあとはこっちで運転するからさ」
　そこが問題ではないと思うが、確かに俺だけが襲われないなら俺が行くのがいいし仕方ないかなとため息をつく。あまり常識に従った行動は脳を疲弊させるだけだと、改めて自分に言い聞かせ、ついさっき登ったはしごを降り始めた。

　ギアチェンジは……D にすればいいはず。んでアクセルがこっちで……。
　と四苦八苦しながら初めての運転をこなしていくと、２度ほど色んな意味で背筋を凍らせる引っ掻き音が鳴ったが、無事なんとかつけることができた。
「大丈夫？　何回かぶつけてたけど」
　俺は助手席に移り鴻巣が運転、志木と宇多は後ろだ。乗り込んできた志木が心配そうな声でたずねてくる。
「あぁ、ゆっくりだったからどうってことはなかったな」
「いい傾向だねぇ。順応力もある」
「こんな状況に順応力も何もあったもんじゃないっすよ」
　気分的にはバーチャルリアリティのゲームをやっているような感覚であるからして、現

実味がないという奴だ。
　それにしても、だ。
「本当に襲ってくるんだなぁ。こっちの方が馴染みはあるような気がする」
　先程から何回か人をはねている。かなりグロい。
　学校の敷地内だろうと容赦なく、車体にも容赦なくスピードを出している。だからまともな感性を持っていたなら車線には出ないようにしようと思うはずである。
「奴ら人並みの頭も持ってないようだからね。脳までやられちゃったように見える」
　鴻巣は口笛を鳴らしながら片手運転だ。
「でもなぁ、ぼくとしては君のお陰でまったく安全にドライブを楽しめると少なからず思ってたんだけど。原因ってなにか分かるかい？」
「……たぶん、相殺、されてる」
　知るかそんなもん、と口を開きそうになったが、宇多から反応があった。
「あーやっぱりねぇ。さすがにそこまでの力はないかぁ」
「力？　俺のかい？」
「あーうん。そういうことになるんだけど、その辺の説明……というかまずは君にどんな力があるか調べてみないといけないからまだ話せないんだ、ごめんねー」
　フロントガラスに赤黒い何かが飛び散り、ワイパーがそれをよけていくなかで殊勝なことを言われても……、と思うがだからこそ落ち着いてから説明をということなのかと今さらに納得する。
「志木と宇多はよくこんなグロいの平気だよな」
　とりあえず方向だけはわかっているので、原因がある点を発見するまでは走りっぱなしだ。鴻巣はぶつぶつ口の中でよくわからない独り言だったりジャンルも年代もはっきりしていない鼻唄をしていたりで話し相手になりそうではない。だから俺は定期的にスプラッターなことになっているこの景色を話の引き合いに出した。
「え？　あぁ。……もう、慣れたからね」
　慣れた、慣れたねぇ。さっきも仕事だからと言っていたし、こういうことを前々からやっていたかのような口ぶりだ。
「その辺もあとで、みたいな感じ？」
「……うん。ごめんね」
　また謝られてしまった。気分的なものがかなり違うが。
　それきり会話は途切れ、俺は目の前の惨状を常に入れていては毒だと思い、目を閉じた。

「……次、右」
「あいよー。こりゃまた、ひどいな」
　周りの建物よりずっと高い、市役所のビルがもう見えている交差点にさしかかったらしい。鴻巣は宇多の言葉にすぐ反応してハンドルを切る。そこはまた、一段とゾンビたちで溢

れ帰っているようだった。
「原因が近いから多いってこと？」
「いやぁそんな理性的なもんじゃないと思うけどね。単純に人の数がいたからじゃあないかな。……３人とも、どこかに掴まってて」
　言った瞬間、からだがシートに押さえつけられる。アクセルを目一杯踏んだらしく、速度計がぐんぐん上がっていく。
　ある種、歩行者天国的な様相だったそこに車をそのまま突っ込ませた。当然次々と衝突、または踏み潰す音が響いてくる。
「馬力が違うなぁ。金があれば買いたいものだ……」
「いつどうなるかわからないから車は買わないって言ってたでしょあなた」
　……車内はこの呑気さだからなんとも言いがたいのだが。
　しかし、確かにいつも乗っている車より加速があってそれに車体も丈夫である。普通こんだけ衝突事故を繰り返せばどこかにガタが来そうだ。
「誰の車をかっぱらってきた？　そもそも先生たちは今日いたのか」
「教員ってもんは土曜は大体出てくるもんだよ、部活あるからね。誰のかはわかんないなぁ、最初っから丈夫そうな車に目星を付けてただけだから。値段、わかんない？」
「……６か７００万、くらいだと思う」
「たっけえな。てか宇多、車趣味とかあったんだ？」
　マークのレリーフはどこぞの国内メーカーだとかろうじてわかるが、車種はさっぱり。高そうな黒塗りの奴っていう見た目の感想しか言えない。
「性能とか値段とかなら見るだけでわかるからな豊支さんは。車マニアよりよっぽど車マニアだなぁ」
　鴻巣は含み笑いをしながら順調に人をひいていく。完全に悪役の貫禄はある。
「……スト、ップ。そっちの方。鴻巣は、来ない方がいい」
「はいよー。ここは、たしか図書館だったかな？　ここに目標が？」
　たぶん、という宇多の声を聞きながら車は止まった。
「さっさと出てね。囲まれるから」
「まあ精々死なないように、頑張って」
「そちらこそ、この一回で終わらせるように」
　志木は何やら鴻巣と話ながら車から降りる。金属が当たるチャラチャラしたような音が鳴り、何をしているのだろうと振り向くも、３人が出るとすぐに去ってしまった。
「どうせ襲われないんでしょうけどこれ、渡しておくわ」
　二人は、迅速に足音を立てず早歩きで図書館の方へ向かってしまうから、俺はまた慌てて追いかけるはめになった。その道中、志木が隣に来て耳元でそう囁かれる。
「これは、棒？」
「警棒のようなものよ。伸縮性で、電気も流せる優れもの」

志木は慣れた手つきで伸ばして頭上にあった木の枝を折る。
「電気は、奴らに効くのか？」
「５秒くらい硬直してくれるから。十分でしょ」
押し付けられてしまった。服の中から取り出したが、いつもそんなものを持ち歩いていたのか……？　中学生のナイフとは訳が違うぞ。
「本当はあなたにもこっちを渡したいんだけど、ろくすっぽ扱えないでしょ？」
さらに懐から問題のブツが現れた。
「おまそれ、拳銃？　ほんもの？」
「エアガンなんて持ってきてどうするの。名前は忘れたけど、反動が少ないタイプらしいわよ」
見れば宇多も自然な動作でそれを取り出し、ハンドガンを持つフォームなどは知らないが、様になっているとは分かる格好をしながら早歩きを続ける。
「……お前らは、特殊警察かなにかなのか？」
学生が普段は世を忍び、有事になればその特別な能力で事件に立ち向かう！　っていう俗な刑事ドラマ。ありそう。
「ま、間違ってないわね」
間違ってないのか……と思うが間もなく、二人は銃の先端に何か細長いアタッチメントをつける。
「……それは？」
「サイレンサー、……サプレッサーとも言うのかしらね。ともかく、銃声をなくすための道具よ」
なるほど、音にも反応するのであれば当然持ってこないといけない。とは、理屈では理解できるが理性が理解を拒む。幼馴染みがゾンビを目の前に平然と拳銃を構えている光景に、やはり実感が沸かない。
「前５０m。恐らくゾンビ、２」
この図書館は林に囲まれていてそれでいてちょっとした上下の勾配があるから、その姿はここから見えない。落ちている葉がカサカサと音を鳴らしながら緩い坂を上っていると宇多が唐突にそう言った。
と同時に坂を上りきり、下りの終わりから広い芝生が見え、その奥にそれなりに大きな図書館の建物が見える。
「しゃがんで。建物までは７５m といったところかしら。そうね……、新ちゃん、まずあなたがあの玄関まで行ってちょうだい。私たちが入れそうならそうメールを飛ばす。ダメなら私の方から何をすればいいかメールを返すわ」
「新ちゃんはやめてくれ。入れそうな、っていうのはゾンビがいないかどうか、ってことか？」
宇多が言ったように目を凝らすと広場のベンチに人影が見える。

「１０体までなら平気よ。あなたが離れると私たちが気づかれるかもしれないから、早めにね」
「じゃあ一緒に行った方がいいのでは？」
「生存率より成功率を重視していいのよ。この理由も、後ね」
　志木は口角を少しだけ上げて、囁くような小さい声で呟く。
　それは、つまり、死んでもいいと？　死ななければ安いの精神がいらない世界など存在するのだろうか。
「……わかった。走っていこう」
　襲われないのは確定らしいので歩こうかとも一瞬思ったが二人に危害が及ぶのなら息が上がるのもやぶさかではない。その、なんだ。夢かもしれないのはしれないが、さすがにここまで来て身近な人が死んじゃうのはつらいものがある。
　やはり、ゾンビの隣を走り抜けても手出しはしてこない。むしろこちらを見ると目を逸らしているかのようにすら思える。
「……ふぅ。久しぶりに入ったな」
　ロビーと閲覧室が分かれていて、外へ向けた壁はガラス張りだから光がよく入ってくる。
「そういやこいつらは光とか平気だったんだな」
　読み物なら朝日を浴びれば灰に、とかよくあった気もするのだが。いや、ゾンビハザードものは大抵そんな甘いもんじゃないか。
「ほい送信っと」
　ロビーにいたゾンビは５体だったが、俺が入ったとたんに他の部屋へ入っていってしまった。やはり避けられている。
　送ってすぐに、外からなんだか呻き声が聞こえてくる。
　ガラスから覗くと、背中合わせでこちらに走りながら銃を撃っている志木と宇多が見えた。
「……あんなにうじゃうじゃ集られるもんかね？」
　車に乗っていた時とは訳が違う。どこからやってきたのか、１０匹では足りない数のゾンビに割と鬼気迫る形で襲われている。
　半ば呆然と銃撃戦を見ているといつのまにかすぐ近くまでやって来ていた。……自動ドア開けておいた方がいいか。
「ここ強化ガラス？」
「……強化ガラス」
　了解、と志木が言うとドアから離れているようジェスチャーされ、二人も十分離れて入ってこようとするゾンビに向けて銃を打ち続けている。もちろん、時々マガジンを交換してはいるが。
「新ちゃん新ちゃん、ごめんなんだけどこの死体たち全部外に放ってくれない？」
　にっこり作り笑いをされている。顔を斜めに手を合わせて。

「……どうしてお前らはやらないか聞いてもいいか？」
「ひらにい、は、感染しない」
「感染って、ゾンビの病原体みたいな奴にってこと？」
　無言の肯定。襲われないどころかそこも特別なのか。
「……ういうい、やっておきますよ」

　自動ドアを閉めるために避ける必要があったらしい。中々重く、中々臭いそれを外に頑張って全部引きずっていった。
「終わったぞ……」
「ご苦労様ー。じゃあ下がっててね危ないから」
　閉まったのが確認されると、志木は拳銃を掲げ自動ドアのセンサーの機械に照準を向けた。
「……壊れてるわね。じゃあ中の探索と行きましょうか」
　壊した本人の身をもって壊れているのが確認された。
「強化ガラスって言ったけどよ、化け物たちの腕力に耐えられるのか？」
　普通に閲覧室へ向かおうとした時に何げなく聞いたその一言に、くぐもった銃声が一発響いた。
「……大丈夫、でしょ」
「お、おう……」
　見れば宇多が窓に向かって発砲していたようだ。窓に近づくと少しだけ、小さな部分だけが砕けた窓と、転がっている銃弾があった。
「強化ガラスってのは、侵入を拒めるくらいの強化ガラスのことを言うのよ。しょぼいのだったら意味ないじゃない。さ、早く行くわよ」
　まあ確かに、言われてみればその通りなのだが。以心伝心でそんなことをわかりあえて、拳銃を躊躇なく早打ちできるその感性に、俺は嘆息を止められなかった。
　閲覧室に入ると正面右に貸出とか返却とかをする受付がある。他には児童書がその近くで奥には小説と専門書とがあったはずだ。
「当たり前だが、受付の人はいないな」
「いたとしてもゾンビね。頭をこう、パーンっとしないといけない」
　俺は警棒をかまえているが、拳銃二人組のせいでそこにいたゾンビたちはすぐさま排除される。…俺らのことは見かければ追いかけてくる、くらいの注目度らしい。完全無視ではないし、狂ったように気配を察知して大挙してくる、というほどでもない。
「それで、原因はここにあるらしいが、どれだとかどこにあるだとかわからないのか？」
「……見れば、わかる。どこなのかは……わからない。この建物なのはたしか」
「図書館なんだし、その原因ってのは本だったりするのか？」
　安直だけど。この大災害が一冊の本から生まれているというのはなんともすごい話では

あるが。
「それも、わからない」
「その辺に置いてある観葉植物が目標かもしれないし、もしかしたら建物の中に誰かがいてその人が原因かもしれない。まあ、物のほうが対処が簡単で助かるけどね」
　志木がその観葉植物が置いてある柱の陰から飛び出てきたゾンビの頭を撃ち抜きながらそう言う。
　対処、対処なぁ。このゾンビの黙示録をどうにかできる方策があるというのだろうか。
　……考えても仕方ないから俺は、この二人の後ろをついていく他ないわけだが。
「一つ聞いておきたいが、その対処とやらで俺がやることって何かあるか？」
「この建物の中では、たぶんないわね。建物を出た後は、詳細が判明しないとわからないけれど」
　児童書エリアはくまなく見終わり、ライトノベルとかゲームノベルだとか若者向けの小説を中心に取り揃えたコーナーに移る。
　その中にある本を見て、俺は思わず手に取ってしまった。
「その本に何か思うところでも？」
「……先月発売だ。こんな新しいのも置いてくれるのかと、な」
「もしかして、買った口？」
「正解」
　別に現物を求めて本を買う性格でもないから、ただで読めるならそれに越したことはない。いや、税金が使われてるのはわかっているが。
「……新刊は、１００人予約がはいったり、する」
　宇多に壁へ指をさされた。見れば、今週の予約本ランキングと銘打たれたポスターが貼ってある。一位が新聞社が主催していたはずのなんとか言う新人賞を獲った本で、その下はよく聞く人気ホラー作家……。ライトノベルも何冊か見える。下のほうに行っても３０人だとか４０人だとかに予約を入れられているらしい。
「……なら、普通に買うか。ここにあったのは運が良かっただけ、と」
「世の中うまい話はそうないってことね」
　カラカラと志木に笑われてしまった。
「まあ、昔のを読むならやっぱりいいんじゃないの？　いっぱいあるじゃない」
「確かになぁ、この辺の専門書は自分で買えようもないし……」
　適当にとったハードカバーの数学本は四千なにがし円する。小遣いってレベルじゃねーぞ。
「私たちは調べものするときそれなりに入るわよ？　学校とは蔵書量全然違うし」
「テスト勉強とかそういう？」
　クラスでも時々図書館に集まって勉強しようとかそういう声が聞こえることがあるけれど。

「あー、そういうんじゃなくて、本当に調べもの。いろいろデータベースを探ってみたり昔の新聞見なきゃいけなくなったり、めんどくさいこと多いのよ」
「ふーん。あ、なら今度その調べものをするときに呼んでくれよ」
「いやがおうにでも付き合うことになると思うけど。まあ、考えとくわ？」
　片眉が上がった。仲良くしよう的な……そういう戯れだったんだけどなー。
「……一階閲覧室は、なし」
　志木と話していたらいつのまにか最後の列まで来てしまったらしい。本棚には昔の文豪や哲学者の全集が並んでいる。
「あと何の部屋があったっけ？」
「……二階に郷土資料と図鑑の本棚がある閲覧室、パソコンを使える部屋。一階はあと書庫くらい。もちろん、従業員用の部屋とか会議室とか、トイレとかも、ある、けど」
　宇多が一気に言い切った。最後の方は息も絶え絶えといった感じで。
「おい、大丈夫か？」
「へい、き。しゃべりすぎた……」
「あんまり無茶させないでよね。この子は大変なんだから。それで次の行き先だけど、順当に書庫でいいんじゃないかしら？　建物の移動すらある程度の危険があるもの」
　息が弾んでいる宇多の背中をさする。
「書庫ってのは、そのまま本を置いてあるとこだな？」
「大昔の、環境に気を使わないといけない奴とかがあったりするわよ。後は普通に経年劣化で人様に見せられないくらい汚くなっちゃったのとかね」
　書庫、というのは館内案内板に載っていなかった気がするが、受付を乗り越えたバックヤードにあるらしい。横目に事務室を捉えながら志木が先頭で奥へ進んでいく。
「第一閉架書庫……」
　志木が鍵を開けた。そんなもの事務室から取っていったような動きは無かった気がするのだが、いつのまに。
　入った瞬間、木の臭いがした。そして見渡すばかりすべて本棚である。
「どう？　この中にありそうじゃない？」
「……たぶん、ない。けど……、これ」
　宇多が数ある本棚の中から一冊の本を持ってきた。
「『面白い』本……？　なんだそりゃ」
　作者の名前は、書かれていない。しかしバーコードのついたラベルが張ってあることからきちんとこの図書館に管理された本だということは分かる。
「……あなたにはそう読めるのかしら？　私には『――』と書いてあるように見えるのだけど。それに、これかなり昔に流行ったベストセラーよ。宇多ちゃん、その本かして」
「だめ。ひらにいが持って」
　志木が言ったこの本の題名を聞き取れなかった。しかし、どう頑張って読んでも、面白い

本と書かれていて面白いという文字を二重鍵かっこで囲んでいるようにしか見えない。
　そして手渡されてしまった。志木は大変残念そうな顔をしている。
「別に俺は読みたくもないんだが」
「……いいから。中を見て」
　その本はハードカバーで、それなりに読みごたえのありそうな分厚さと重さを持っている。
　言われるがままに中を開いてみるが……なにも書いていない。真っ白である。
「……おい？　ベストセラーなんじゃないのか？」
　パラパラとめくっていくが全て白い。それもコピー用紙のように劣化した様子もない完璧な白さを保っている。
「何を言って……？　はっ、そういうことか。……宇多ちゃん、そうならそうと先に言ってよ」
「……作用を、見たかった、から」
　ついに最後のページまで来た。ここまで白紙しかなかったが、ここにきてあとがきが書いてある。
「『あとがき：本の面がどこなのかはわからないから、とりあえず文面を書く場所のことにする』　……わけがわからんぞ？」
「『面白い』本、だから……」
「面、白い本ってことでしょ。……普通に見ていれば本当に面白い本だと誤認しちゃうとかその辺かしら？」
　志木は大変不機嫌そうな顔をしている。
「えっと、つまりどういうことだってばよ？」
「……本当は、白紙でしかない。けど、この本は人の心に作用してこれが面白いものだと、おもわせる」
　えぇ……？　なんだそりゃ……？
「……はぁ。私たちの仕事ってのはね、こういうもんを相手にしたものなのよ」
「え、でもじゃあなんで俺は……」
　白紙だときちんと認識できた……？
「あなたはね、この本、あとこのゾンビ騒ぎを引き起こしてる元凶。その他私たちが追ってるありとあらゆる”物体”に対して絶対的な抵抗力を持つの」
　うおお、話が飛躍してきた。
「……まあ、すぐにはわからないでしょうけど。ゾンビのほうを終わらせたら全部話すから、覚悟してなさいよね」
　フン、と鼻を鳴らして踵を返して部屋から出て行ってしまった。
「なんぞこれ」
「……早く行こう」

　目の前で宇多がこちらを見上げている。通路をふさいでしまっているらしい。
「了解だ」
　この時点で俺は、深く考えるのをやめた。

「……あ、れ」
　第二……と書かれている部屋に入って正面の本棚に挟まれた通路、そこの地面に一冊の本が見開きで落ちている。宇多がそれを指差していた。
「私は触らないほうがいい？」
「まずい、ね。ひらにいだけにしとく、べき」
　どうやらそうらしいので、素直に本まで近づく。
「……こいつが原因だっていうのか？　何語だこれ、読めねえ」
　アルファベットなのかすらもわからないし、アラビア語とも違う気がする。ともかく、見たことがない。表紙も見てみるが、やはりわからない。
　それに、普通の紙ではない気がする。
「これ、パルプで作られた紙じゃないと思うんだけど、どうだ？」
「んー……、何かの動物の、皮、かも」
　羊皮紙なんて見たこともないし何の動物かは見分けつかん。人間の皮、なんてこともないだろうしな。
「これ、どうすればいいんだ？」
「とりあえず全部のページを見ていって」
　素直にさっきやったのと同じ行動を取る。パラパラっと見ていく。
「……全部のページ、読めないな」
「そう。なら……そうね。……なんて言えばいいかしら」
　何かを志木は口に出したいらしいが、言葉が定まらないらしい。
「いいですか新ちゃん。いつに、とははっきり言えないのですがあなたは……日付を遡ってベッドの上で目覚めます。私たちが迎えに行くのでそれまで待っていてね」
　これまで、何度か見た気がする志木の笑った顔。その顔を妙に、哀愁漂うものだと認識した。
　そして、志木は、手に持っていた拳銃を、ゆっくりと掲げる。
「おい、何をするつもりだ」
「……ごめんね。あなたのことをこっちには連れ込みたくなかった。けどまあ……こうなったら仕方ないわ」
　嫌な、予感がする。
「下手な真似はやめろ。おいっ……！」
「安心して。私にも、あなたが持っているその力と、同じ質のものが、あるのだから」
　先が長くなっている拳銃は、俺でもなく、宇多でもなく。そう、何となく理解していたこ

となのだ。その銃口は、志木本人のこめかみに、あてられる。

（体験版ここまで）

作者あとがき

　えっち小説書き始める前に書いてた小説です。三人ともR－18適正高いなー。どうしよっかなー。って考えてる最中です。もしかしたらその内出るかもしれません。
　エピソードは三話目まであります。続編に収録されていると思います。

　本編にも言えることなんですけどわかりにくいですねこの文章。なんというか情報過多でそれでいて纏まらせることを意識してるのでそういうことになるのですが。この展開どうなってんのっていう質問があれば各所で受け付けています。その回答はこの作品から外れた二次創作のようなものと思ってください。この小説はこの小説です。

世界：物体蔓延り、怪盗：愛を掘り当て、探偵：さき開く恋。1

2019年9月4日作製

著者・イラスト：あーかんそー州

発行サークル：合衆国書房